
混純（カオス）置き場

裏鏡 美委

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス
混沌置き場

【Nコード】

N3477P

【作者名】

裏鏡 美委

【あらすじ】

誰かの勝手な要望により作られた小説置き場・・・
その誰かが作者だったりするのだが・・・
三つの小説を置いている混沌カオス小説！！
いちど、のぞいてみたら？

挨拶 （絶対にお読みください。じゃないとこの小説の見方のルールがわかりま

えーこの小説は僕裏鏡美委が「書きたいときに、好きなアニメの小説が沢山書きたー！ーい！！！！！」という

要望から生まれてしまった小説です

混純^{カオス}つまり、多種な小説が入っています

いや、あれじゃないですよ？あのーミックス小説？

つまりーハガレンの世界でリボーンのカラクターが大活躍 って
きなんじゃないくて

この大きな中に、色々な小説を分けて書きます。

この中には、『テガミバチ』、『鋼の錬金術師』、『ディー・グ
レイ・マン』、の小説が入っております

つまりーこのなかには三つの小説が入っているわけであります！！

ここで注意！！絶対読んでください！！

題名のついているものだけが、書かれている小説です

題名が無く、「」だけのものは「あ」しか書かれていないため、
よまないようお願いいたします

この小説は好きなときに書くものなので、多少の時間の間はお許

してください。なお皆様の思っている多 少と僕の多少にはかなりの差があることでしょう

章によってどの小説なのか分かるので、迷うことは無いと思います

十話ごとに章を変えますので、そのおつもりで・・・

完成している話には完とついているので、それを基準でみてく
ださい

最後に

えーマコトに勝手ながら僕の要望、否欲望(?)で生まれた小説で
すが、

もう1つの小説とともに、こちらも頑張るので宜しくお願いします

以上!!!

手紙とテガミバチ

完（前書き）

ここに主人公の設定を書かせていただきます

主人公

名前 ログ・シーイング

性格 折り目正しく、泣き虫かつ優しいなど、すべてラグ譲り

誕生日 瞬きの日生まれ

容姿 銀髪、暗褐色の瞳。アルビス種

家族 父母不明。兄ラグ・シーイング（双子）

肌を裂くような夜風。何も無い荒野。そこに「BEE」・・・通称テガミバチのゴーシュ・スウェードがいた

「ヨダカ地方南部714、コウザベル3211。間違いなくこの辺りのはずなのですが・・・」

周りには枯れた木ばかり。手紙らしい物は何一つ見当たらない

「それにしても・・・」

ゴーシュはある一軒家を見ながら呟く

「どうやらひどい火事があったようですね・・・」

しばらくその焼けた家を見てみると、ゴーシュのディンゴロダが何かを見つけて鳴いていた

「そんなところにありましたか」

ゴーシュは地図をしまいながら歩み寄っていく

「珍しいポストサインですね。家事の影響は・・・!」

ゴーシュはその『手紙』を見て言葉につまる

ロダの隣にいたのは・・・

「この子は・・・」

横たわっている一人の少年だった

「・・・手紙・・・」

ゴーシユのマフラーをけて優しいとは言えない夜風が撫でた

あれ・・・どうしてかな、いつもより空が明るいや・・・

お母さん？お母さんでしょ？お母さんの手いつも冷たいんだ

どうしたの？ログ。クスツログは甘えんぼさんだなあ・・・

何？聞こえないよ、ほらログも困ってる

お母さん・・・どうして泣いてるの？泣かないでお母さん・・・

ログもどうして泣いてるの？こっちにおいで、一緒にいてあげるから・・・

違う・・・お母さん・・・でもログでも・・・な・・・い・・・

君は・・・

「はっ、誰！？っだ・・・」

「ああ、はい僕はゴーシュ、ゴーシュ・スウェード18歳です

ただいまユウサリの市場で買った缶スープを開けようとしていて

ああ、これ具はイマイチなのですがとにかく便利で・・・」

勝手に色々話していたゴーシュを止めるかのように隣にいたロダが
鳴いた

「・・・」

少年は啞然と見ていた

ゴーシュは一度咳払いをしながら話し始める

「すみませんトークが下手で・・・この子はデインゴのロダ

デインゴとは僕らの仕事言葉で相棒という意味です」

ロダを撫でながらゴーシュが言った。そしてその少年を真っ直ぐ見
据えながら言う

「・・・ラグ・シーイング」

名前を呼ばれた少年は瞳を大きく見開き近くに落ちていた枝を持っ
て立ち上がる

「どうして僕の名前を知ってる！お前もあの光へお母さんを連れ去
って

ログをボロボロにして捨てた連中の仲間か!？」

敵意むき出しでゴーシュにくいかかる少年・・・ラグ

それとは逆に驚きながらあの光・・・首都暁をみているゴーシュ

「君の母親が首都暁に・・・？」

それにボロボロにして捨てる・・・とは？」

「お母さんとログを返せ!!返せよ!!」

涙を零し、声を枯らしながらゴーシュに罵声を浴びせる

しかしゴーシュは静かに立ち上がる

「何があつたか知りませんが、君の心はまだ回復していないようですね」

「は・・・」

「君の名前は左肩に添付されている配達用紙で確認しました」

「配達用紙？」

ラグは不思議そうに左肩を見る。たしかに貼られていた

「品名、人、アルビス種、七歳男、割れ物、ラグ・シーイング」

ゴーシュは一問おいてまた話す

「いつもは紙のテガミを運んでいます、どうやら今回は人間・・・

君のようです」

「なんの事だ！お前は！」

「BEEという職業を知りませんか？僕の仕事は、アンバー・グラウンド国家公務郵便配達員

「BEE」通称テガミバチ」

ラグはゴーシュの被っている帽子に蜂の刺繍があるのを見つけて呟く

「テガミ・・・バチ」

「首都を除いたこの国の街から街へ旅をし、どんな危険もいとわず国民の大切なテガミを

お届けする。それこそが、テガミバチの仕事なのです」

「ん・・・？」

「って、これ一応マニュアル台詞なんですけどね」

そう言つとゴーシュはラグに微笑みながら

「だいたいの状況は分かっただけでしたか？」

問いかけた

「君の配達用紙切手料金に不備は見当たりません。よってこれより君を配達物とみなします」

「え・・・？」

ラグは不思議そうにゴーシュを見上げた

「ですから君自身の事、つまりテガミの内容など僕が知る必要はありませんし

知った事ではないのです。興味もないので、話さなくて結構ですよ」

「むっ！」

「では行きましょう、ラグ・シーイング。君の宛先へ」

「っふん！」

そう言っただけで歩き出すゴーシュだが、ラグはついて行かなかった

顔をそらしているラグをゴーシュは・・・

「うわぁ！？放せよ！！！」

肩車した

「ご心配なく。仕事ですから」

「誰がお前の心配なんか！放せよ！僕をどこへ連れて行く気だ！」

その問いにゴーシュは懷から地図を取り出す

「宛先はヨダカ地方南部624137-22、キャンベル・リート
ユス

109番地、サブリナ・メリーさん宛です」

サブリナと聞くと、ラグは身を乗り出す

「サブリナ？昔近所に住んでたおばさんだ・・・」

「それから配達以来主、つまりテガミを出したのはアヌ・シーイン
グという方です」

その名前を聞くとラグは瞳を目いっぱい見開き声を上げる

「お母さん！？嘘だ！そんな訳ないだろ！こいつ！この！」

最後にはゴーシュの頭をグーで殴る

「いたついたい、いたたた」

「ばかー！」

小さく悲鳴をあげるゴーシュと殴り続けるラグ

しかし、すぐにラグは殴るのをやめた。

「・・・ログ・・・」

不思議に思い、ゴーシュがラグに

「どうしましたか？」

と、問う

「歌・・・歌が聞こえる・・・ログだ！絶対ログだ！早く！あっち！」

ラグの指さす方向には、さっきと同じポストサイン

「・・・もう1つこの辺りに配達依頼がきていました。

きっと君と同じ様なテガミがあるはずですから、行って見ましよう」

近づいていくほどに大きくなる歌声

その声はとても綺麗で、澄んでいるのに凜とした声

その歌声は哀しみに暮れていて、生気は無かったけれど。

それでも、とても心に染み渡る歌声と歌詞であった。

歌声は途中で消える。そして次に聞こえたのは大きなため息

「傷は癒えたけど・・・お母さんはいないし

ラグもない・・・それにテガミバチさんこないし・・・」

一人の少女は服をめくり、腹を出す

「あっ・・・」

傷口開いてる・・・」

痛そうに顔をしかめる少女

「くっ!! ログ!!」

「待ちなさい! ログ・シーイング!」

少女・・・ログが傷を負っているのに絶えられなくなったラグは岩陰から飛び出した

ゴーシュの制止を無視して

「えっ・・・? えっと・・・」

「ログ!!」

ラグは飛びつく様にログと呼ばれた少女に抱きついた

「あの・・・ラグ・・・?」

ログも戸惑い問いながらも抱きしめ返した

「そっだよ！傷・・・大丈夫？」

「あつ・・・うん。大丈夫・・・。ちょっと・・・本当にちょっと痛いだけ」

ログは笑いながら言うが、どう見ても大丈夫には見えない。腹部からは今だにとまらない

真っ赤な血が流れていた

「大丈夫って！そんな訳ないだろ！？こんなに血が出て！！」

「大丈夫・・・大丈夫だから・・・って・・・ラグ、くすぐりたいよ・・・クスクス」

ログが押さえていた手を優しく退けると傷口を舐め始めたラグ

「大丈夫だよログ！ちょっと待ってね・・・」

「うん。ありがとうラグ」

今度は素直に聞くログ

ラグは自分の着ていたシャツを脱ぐとログの腹に巻く

じんわりと血が滲む。さっきまで色が無い生地汚れがついているだけのシャツは

赤黒い柄がついた

「よし、これでOK・・・」

ふうと息を吐くとラグはその場に座り込んだ

「ありがとう・・・大好きだよ！ラグ！」

手当てをしてもらったログはさっきとは逆に、ラグに抱きついた

「ははは・・・どういたしまして」

ラグは嬉しそうに笑った

「えっと・・・ごめんなさいテガミバチさん・・・忘れてて」

ログはラグから離れると、ユウサリの市場で買ったと思われる缶ス
ープを食べていた

ゴーシュに誤った

ゴーシュは少し驚くと、缶を地面に置いてログの方に向き直った

「いえ。君が気にする事ではありませんよ。」

一応確認ですが、君が『テガミ』ですか？」

ログは、微笑みながらゆつくりと頷く

「はい。私が『テガミ』です。」

宛先はヨダ力地方南部624137-22、キャンベル・リート

ユス

109番地サブリーナ・メリーさん宛です。

名は、ログ・シーイングといいます」

そう言つて深深と頭を下げるログを見て、ゴーシュはひどく関心したように頷く

「全部分かつていてもらえると助かります」

「では行きましようか・・・ってラグ？」

歩きだそうとしたログをラグは抱きかかえた

「ログはまだ腹の傷治ってないだろ！そんな体で歩いたら治らないに決まってるだろ！」

ログはラグにそう怒鳴られ、静かに頷くと身をラグに預けた

「そういえば、ログといいましたね。貴方は依頼人の方が誰なのか知っていますか？」

急にゴーシュが問う

ログは言葉に詰まる。知らないらしい

「言つな！こんな事ログが知っちゃいけないんだ！全部あいつ等のせいなんだ！！」

ラグはそう叫ぶとゴーシュの足を素早く蹴った

「いたっ・・・ですから、テガミの内容を知るわけにはいきませんので、

その続きは目的地に着いてから話していただければいいですし・

」

「あの光から！・・・悪い奴らが来たんだ・・・」

ゴーシュを無視し話し始めるラグ

「お母さんな訳がない・・・」

途中から泣き出しながら、それでも話すことをやめないラグ。

「ラ・・・グ・・・」

ログもラグの腕の中で泣き出していた

「お母さんが・・・僕とログを・・・ずでだりじない・・・ずるもん・・・が！」

下のログの頬にラグの涙が落ちる。しかし、どれがラグの涙なのか分からないほど

ログも声無く鳴いていた

ゴーシュはそんな二人を静かに、しかしなにか悲しげなまなざしで見つめていた

その瞬間に夜風が吹く

ラグはログを抱く腕に力を入れ、ログはそれに答えるように身をよせる

そして、ゴーシュのマフラーを先ほどよりも優しい風が撫でた・・・

「いい加減ログを降ろせよ」

ラグがぶつきらばうにゴーシュに言った

あれから長く歩いてきた。

ラグはログの上着を着ていて、相変わらずログの腹には柄のついたラグのシャツが巻きついていた

何故ラグがこんな言葉を投げかけたかというところ・・・

その後、ゴーシュがラグからログを取って肩車していたからだった

ゴーシュは二人の身体を心配しての行為だったのだが、逆にラグが機嫌を損ねてしまったのだ

「ですが、貴方の身体も危ないですし・・・」

「僕の事なんてどうでもいいんだ！とにかくログを降ろせ！..」

「ですから・・・体力の差という物があるでしょう?」

「・・・ログがいると、疲れなんて感じない・・・」

どう言っても反抗してくるラグの説得を諦めたのか、ゴーシュは一度大きくため息をつく

ゆっくりとログを降ろした

「ありがとうございました。テガミバチさん」

ログがそう言ってラグのところに歩み寄る

ラグはすぐにログを抱いた

・・・それはもう軽々と

「やっぱり、僕じゃないとラグは抱いちゃ駄目・・・」

「クスクス・・・私はラグにしか抱かれないつもりだから」

そう言ってログはラグに身を寄せる

「さて、これから向かうキャンベルはここヨダカでは最南端の街です。

ただ、ルートデータがまだ無く暗闇の程度やガイチュウ鎧虫のテリトリーも不明でして・・・」

ガイチュウ鎧虫と聞くと、ラグ、ログが首をかしげ

「「がい・・ちゅう?」「」

綺麗に重なって訊いて来た

「街と街の暗闇に生息するとても凶暴で危険な生物です。

なにしろ彼らは、人間の心に反応して、襲う習性を持っていますから」

またラグ、ログが首をかしげ

「「心?」「」

と訊いて来た

「ええ。そして鎧に覆われたその身体は剣よりも強く硬く、拳銃の弾すら跳ね返してしまうほどで・・」

ゴーシュが話している最中に、ラグとログは崖の上に何かを見つけた

そして、二人で指をさして

「「もしかして、あんなヤツ/あのような物?」「」

と言った

ゴーシュは二人の指さした方向を見る、すると

どがあああああああ!?!?!?!!

という、凄まじい音と共に出てきた不思議な生物を見る

「そう！あれです！あれあれ！」

ゴーシュも指を指しながら笑顔で言う

「ええええええ！？」

「うわぁ・・・すごいな・・・」

ラグは驚きに声を上げ、ログは緊張感の無い声を上げる

その瞬間に崖の上から鎧虫が降りてくる

ゴーシュが即座に反応しラグとログを抱えて後ろへ飛ばうとしたときだった

「・・・後ろに3mほど飛んで・・・きつとがいちゅうの声は大きい」

そうログが言ったのだ。少し驚きながらもゴーシュは3mほど飛ぶ

「でっでかい・・・！」

ラグは震えながらもログを離そうとはせず、守るように抱いていた

「がいちゅうd・・・」

「ダイキリ」

ゴーシュが言おうとしていたことをログが言った

しかし、ログは眠っていて寝言でしかない

「・・・随分育ちましたね・・・」

そう言うと、ログが走って行き囷となっている間に三人は崖の上へ登る

「おい！やばいよアイツ！」

とつさにラグが叫ぶ

「ご心配なく。ログが囷となっている間に、僕ががいちゅうの弱点である

間接の隙間を狙うコンビネーションです」

「だったら、早くなんとかしろよ！アイツやられちゃうよ！」

「これは我々の仕事ですから、少し静かにしててください。

集中に欠けると弾の威力が下がります」

そう言いながら心弾銃を取り出すゴーシュ

「でもさっき、銃も効かないって！」

「ご心配なく。これは対がいちゅう用の銃器。心弾銃です」

するとゴーシュの銃の黒い石が光りだす

ラグはその光景に驚いていた

（石が・・・光ってる・・・！？）

「ん・・・？」

ふとラグが、がいちゅうの方を向くとこっちに向かって来るのが見えた

「げっ！？こっちに来る！？」

ゴーシュはがいちゅうの方を向くとしゃがみこみ心弾銃を構える

「心弾装填・・・」

その間にもがいちゅうは迫ってくる

「っ！！わあ！！」

その瞬間だった

「黒針！！」

ゴーシュの心弾銃が火を吹いた。その黒い炎は真っ直ぐとがいちゅうへ向かっていく

そして、どがつという音ともに、がいちゅうに黒い炎が落ちた。すると・・・

ぎやううううううがあああああ

すごい声を上げがいちゅうは爆発し、鎧だけのガラクタになる

「ああ・・・あつ・・・」

ラグは鎧になって地に落ちていくモノと、コンペイトウの様な形をした光を見つめていた

「はあー・・・？」

すると誰かの泣き声・・・空から聞こえてくる

「うつ・・・あれ・・・？」

その時に、さっきいつの間にか寝ていたログが、ラグの腕の中で起きた

「あつ、起きた？今すごかったんだよ！」

「・・・ねえラグ、この泣き声・・・」

「ログも聞えたんだね・・・」

その声を最後にして、辺りは静寂に包まれた

「聞えたんだって。あのがいちゅうの泣き声っていうか・・」

ラグ達は、安全な所で明かりをともし食事を始めようとしていた

ラグはむっとしながらさっき聞こえた声の事を話している

「がいちゅうには心は無いと、ユウサリの学者が断言しています」

ゴーシュは袋をあさりながら言う

「でもねテガミバチさん。私も聞こえたんだよ？誰かの鳴いている声・・」

ログも言うが、ゴーシュは無視してログにスープの缶を渡す

「そんなことより。早くスープを食べる」

ラグはそのスープを口へ運んで・・・

「うつ・・・ゲボマズ・・・」

思いつきり顔をしかめる

「そうなの？一口ちょうだい」

ログはまだ開けていないスープの缶を地面に置いてラグの方に顔を寄せる

「・・・はい」

ラグはさっき自分の使ったスプーンで、ログの口へ運ぶ

「・・・これは酷い・・・ゲボマズです・・・」

ログも顔をしかめた

「えっと・・・テガミバチさん、砂糖と塩とシナモンはありますか？」

ログは瞳に涙をいっぱいためながら訊いた

「ああ、はい。ありますよ」

ゴーシュは袋からログの言った物を取り出す

「何するの？ログ」

ラグは不思議に思い、ログの手元を見つめる

「えつとね・・・砂糖と塩を混ぜ合わせて溶かす・・・

そして、シナモンを少し入れる・・・それをスープの中に入れば・・・」

そう言いながらラグの持っている缶の中に入れる

「よし。はいラグ。口開けて」

今度はログがラグの口にスプーンを運ぶ

「うっうん・・・あーん・・・」

「はいあーん・・・」

ラグの口にスープが流し込まれる・・・

ひと時の沈黙のあとラグが瞳を開きログの顔を見つめる

「おいしい・・・ログありがとう」

ラグはそう言って笑った

「どう致しまして！」

そういつてログはラグの頬に軽くキスをした

「！！」

ラグは驚いて、その後顔を赤くしながらそっぽを向いた

「クスッラグは照れ屋さんだね」

反対にログはクスリと笑いながらラグに微笑みかける

「ですが・・・」

しかしすぐに神妙な顔つきになる

「さっきのスープは・・・ゲボマズでしたね・・・」

思い出したかのように瞳を細めると、苦虫を嚙んだように顔をしかめる

——そうとうな味だったらしい

「うるさい！さっさと食べる！」

ゴーシュは二人に怒鳴りながら、ラグの持っているスープを見つめる

「へっへーん。そんなでかい声だしても、怖くなんかないんだもんねー！」

さっきの姿は何処へ行ったのか、生意気にラグが言った

そして、隣でゲボマズスープを舐めて泣いているロダを抱く

「ほら！ロダもゲボマズだって言ってるぞ！」

そう言った。ロダは「そうだ」とでも言うように、か細く鳴く

「ええ！？ロダまで！？」

ゴーシュは驚き目を見開く、そして頭を抱えた

「はぁ・・・まったく、心弾を撃ったのですから、少しは配慮してくれませんか

ラグ・シーイング」

「はぁ？

さっきのへんてこな銃がなんだってんだよ？」

「硬い鎧に覆われた鎧虫は、普通の武器では通用しません」

ラグは驚いたのか、少しだけ眼を見開く

「だからテガミバチ達は、鎧虫に対抗できる武器をそれぞれに持っているのです」

そう言つと、袋から心弾銃を取り出す

「これが僕の心弾銃です」

そして心弾銃の弾を手にとると、ラグとログに近づける

ラグはそれを手に取り、ログの顔に近づける

「何これ？中がカラッポじゃん」

「空ですね・・・」

そう二人が呟くとゴーシュは応えるように

「そう空です」

と言った

「どついつ事？」

ラグは？マークを浮かべていると隣でログが

「つまり・・・この弾の中に自分の心のカケラを溜め込んで

撃ち出す・・・というものなのでしょうか？」

そう推理を立てていた

「はい・・・正解です・・・」

ゴーシュは相当驚いたのか、所々間が空いていた

「つまりねラグ・・・って、テガミバチさんの方が詳しいですね。

私も詳しく知りたいので、教えてください」

ログは再びゴーシュに視線を向ける

「ああ、はい。」

つまり、この弾にこめるのは僕自身の心なのです。ラグ、ログ」

「へー・・・心・・・か・・・」

ログは歓心したように頷く。そして、

「「心のカケラ／とは？」」

又二人で綺麗に声を重ねながら訊いた

「硬い鎧に覆われた鎧虫を倒すには、その内側に心を響かせる事が

唯一の方法なんです。」

「「でも・・・そんな事・・・」」

二人の言葉でゴーシュは心弾銃を差し出す

「僕の心弾銃にはめ込まれているこの黒い石をご存知ですか？」

ラグは受け取ると少し目を見開く

「これ・・・さっき光ってた・・・」

ログは先ほど寝ていた為心弾銃を知らない。

「そうなの？」

興味津々にラグの横から心弾銃を見つめる

「遥かなる太古では、大地の霊的なエネルギーの存在が小さな虫に宿り

実体化していたと言われています。

精霊虫と呼ばれるその虫は、エネルギーを持ったまま長い年月

樹脂などに閉じ込められ琥珀化した物がその、精霊琥珀なのです。

」

そこまで言うと、ゴーシュは二人を真っ直ぐ見据え又話し始める

「僕はその精霊琥珀と銃の力によって心を武器にして戦う事が出来るのです」

ラグとログはゆっくりと視線をゴーシュへ向ける

「ですが、心は使うと減ってしまいます。まるで食べたら無くなってしまうこの・・・」

いつの間にかリンゴを取り出し一口かじるゴーシュ

「あぁっ！ーリンゴ！なんで自分だけ食ってたんだよ！？」

ラグは叫んだ

「ですから、心弾を撃った後は、心が疲れているので・・・」

ゴーシュが説明したとたんに、ラグはゴーシュのリンゴにかぶりついた

「あああああああ！」

ゴーシュは驚いたのかリンゴから手を離してしまう

ラグは半分食べたリンゴをログの口に近づけた

「えっと・・・食べていいのかな・・・？」

ログは少し引き気味にゴーシュに聞く

ゴーシュはぶんぶん首を左右に振るが・・・

「いいんだよ！」

ラグはログの手にリンゴをのせる

「・・・分かった」

ログはラグの押しに負け、かぶりと食べる

「・・・おいしい」

ログの一口は小さいが味わって食べているようだ

そこをゴーシュは見逃さなかった

「返さない！」

リンゴを取ろうとした時に・・

がぶり

ラグが残りのリンゴを全て食べた・・・一瞬で・・

そしてログの口へと顔を近づける

「何？」

ログが首をかしげるとラグは手で口を指さす

「あつ、そうか」

それだけで分かったのか、ログは口を開けた

すると・・

「ん・・」

ラグはログの口に自分の口を重ねる。いわゆる”口移し”だ

「・・ありがと、ラグ」

「別に・・。だって、アイツだけ食うなんてずるいもん!!」

ラグは照れ隠しなのか、ゴーシュに向かって怒鳴る

「・・・・・・・・・・」

ゴーシュは芯だけになってしまったリンゴを持ち、怒りに震えていた

「サイテーな気分になるのかよ・・・？」

ラグはそんなゴーシュに問いかける

「何がですか？」

怒りたった声でゴーシュは答える

「ゴーシュの心も、そのリンゴみたいに全部食べちゃったらさ・・・」

ラグはゴーシュに背を向けロダの方に向く

「ん・・・」

ゴーシュは少し驚いたように目を見開く

「もしも・・・心の全てを心弾にして撃ち尽くしたのなら・・・」

ラグはその声でゴーシュの方を向く

「肉体だけを残して、ゴーシュ・スウェードという人間は消えてしまっ
まうでしょうね」

ゴーシュの表情はとても悲しそうな、寂しそうな・・

「「ねえ、この精霊に琥珀って真つ赤なのもある？」」

二人は綺麗に声を重ねる。声音もでもが一緒だ

「赤ですか？虫によって色は幾つも存在しますが、赤はどうだったか・・」

答えたゴーシュを二人は真つ直ぐに見据える

ゴーシュは一瞬驚き、帽子の鰐を下げる

「いけない・・部外者の君にこんな話までするなんて・・」

立ち上がり火を消しにいくゴーシュ

「やはり、少し疲れていますね。今日はもう眠りましょう」

ラグは手に持った心弾銃を見つめ、顔をしかめる

（こんな武器が、僕にも在ったら・・ログとお母さんを・・僕が守れたのに！！）

ラグの異変に気づいたのか、ログがラグの手に自分の掌をのせた時だった

精霊琥珀が光だし、瞬く間に二人を包み込む

ウォン！

それに反応し、ロダがゴージュに知らせたときは、もう遅かった

「うわあああああああ！？」

「えっ・・・！？」

光は強くなり、溢れるように二人の体中から輝きを放つ

「心弾が・・・装填された・・・？」

早くなつていく鼓動。二人の感情は完全に恐怖に染め上げられていた

「うわあああああ！？ああ！ああ！うわあああ！？」

「ひゃうっ！・・・っ！！」

驚きに自分をコントロール出来ない。身動きが出来ない。

幼い兄妹にとってはどれ程の恐怖なのだろうか・・・

「琥珀の力が・・・上がっていく？」

ゴーシュは冷静さを取り戻しているが、驚く事ばかりで疑問ばかりが浮かぶ

「・・・いけない！！ラグ、ログ。心弾銃を捨てるんだ！！」

ゴーシュの声は届かない

「うわぁ！？あぁ！？」

「・・・っ！！」

ガシツという不思議な音と共に銃は構えられ、心弾銃は火を噴いたしかし、大きすぎる力に眩いばかり光が形にならず、二人の周りを取り巻く

「ロダ、銃を！！」

まるで最初から分かっていたかのように、ロダは駆けていく

「!」

口ダが銃をキャッチしたのと、二人の放った心弾がゴーシュの頬を掠ったのは同時だった

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

轟々と燃える一軒の家

馬車の中でぐったりと横たわる一人の女性

『待て！お前達誰だ！？お母さんを何処へ連れて行く気だ！』

必死に叫ぶ少年——ラグ

『そうよ！お母さんを・・・連れて行かないで・・・！』

控えめに、しかし必死にラグと共に叫ぶ少女——ログ

（そうか・・・これはラグの記憶・・・ラグの心のカケラ・・・

そして・・・これは？）

暖炉の前で編み物をする、美しく優しそうな女性

（母親の思い出・・・）

畑仕事をするラグと母親。家からパンを持って出てくるログ。

（そうか・・・ずっと三人で生きてきた・・・母親はたった一人で二人を育てた

・・・たった一人で）

『お母さんを返せ！』

マントを羽織った男に飛び掛るラグ

しかし、雑に払いのけられるだけ

ラグの前にはログが立っていた。凍てつくような笑みを浮かべて

『ラグに怪我させるのだけはやめて・・・私を代わりにして・・・
！！』

男達はその言葉でログを殴りだす。ログの意識がなくなるまで・・・

『やめ・・・ろ・・・やめろ！！ログに手を出すな！！』

それでもやまない暴力。ログは意識を闇に落とす寸前にラグに言った

『また・・・会えたらいいね』

その言葉をきに、ログは動かなくなった

男達は荒々しく馬車の上にログを乗せると、ラグを無視して馬車に乗る

『連れて・・・行かないで！！返して！返して・・・よ・・・』

涙を流しながら叫ぶが馬車は止まらない。ああ、ラグの悲痛な叫びは谷間に響く

馬車が揺れるたびに落ちそうになるログの体。

そして、とうおつログは屋根から落ちる。ゴトツという鈍い音と共に・・

彼女の体は地面を転がっていき・・やがてラグの視界から消える

『僕の・・ログと・・お母さんを・・!!!』

(ラグの・・記憶・・)

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

ラグの記憶を見たゴーシュの頬には、涙が流れていた

「お母さん・・ログ・・」

ウォン!

何かを知らせるかのように、ロダが鳴く

「ロダ!・・いけない!」

ゴーシュが見つけたのは、倒れているラグとログ

すぐに駆け寄っていく

地面に落ちていた心弾銃を拾い上げ、使った弾を取り出す

二人の手は、気を失いながらも硬く握り締めてあった

いつの間にか雨が降り出していた

ちー・・・

雨音が世界を支配した感じ。雨しか感じられない。

「んっ……?」

小さな洞窟の中で眠っていたラグは目を覚ます

ゆっくりと瞼を開け、前にいる人物を見据える

「動かないでラグ。ここは安全です。もう少し休みなさい」

ラグは虚ろな瞳で辺りを見回す。自分の真横に探している人はいた

「……」

静かに寝息を立てている天使のような寝顔。ログの顔を見たとなん
にラグの頬は緩む

「僕……どうなったの?」

ゆっくりとした、今にも消えそうな声でゴーシュに訊いた

「原因は分かりませんが、精霊琥珀の力が以上に上がってしまい、
心弾銃が暴発

してしまっただです。」

ラグは今もなお握っているログの手を握りなおし、瞼を閉じる

「アンバーグラウンドには、まだ未発見の精霊琥珀が眠っていると

言われています。

この辺りの地中に高山脈があつて、精霊琥珀が共鳴してしまったのでしよう。

心弾には色々な扱い方があつて、その中の一つ、心を回復する心弾を

君とログの体の中に撃ちこみました。」

ゴーシュが一間置いたとき

「ん・・・あ・・・れ？此処は・・・」

ログも起きた。ログは少し微笑むと、体を動かしログを抱く

「ラグ・・・怪我・・・ないよね？」

ログが心配そうに聞くと、ラグは頷いた。それに安心したのかログはラグを抱き返した

「実を言うと、僕はあまり得意ではなくて・・・効いてくれるといいんですけど・・・」

「大丈夫だよ・・・ログがいるし」

その意味にピンとこなかったのか、ゴーシュは首をかしげる

「ログが心をこめて・・・歌うと、さっきの光みたいのが出てくる・・・から」

「本当ですか？」

とても穏やかな口調でゴーシュが訊き返すと、ラグは大きく頷いた

「だから・・・大丈夫」

ラグはログを少し強く抱く。ログは

「あの光、どこかで見たことあるなって思っていたら・・・歌うと私の周りに

出てくる綺麗な光と、同じでした・・・」

説明してくれた。ゴーシュが「よければ歌ってみてもらえますか？
少しでいいので」

そう言い、ログがハミングなら・・・と、歌いだした。

「ラララ…ラララララ ラララ ララーラ…」

ララ ラララララ ラララ ララーラ…

ララ ラララララ ラララ ララーラ… ラララ ララーラ…ラ
ラララララーラ…」

ログが歌いだして少しすると、たしかに心弾を撃ったときと同じ光
が出てきた

「ラー…」

ラララ ララーララ… ララーララーラ… ラララ ララー
ララー

ラララララー ラララー ラララーララーララー ラララーラ
ーララー

ラララーララーララー…

ラララララー… ララララー ララー ラララー… ラララーラ
ラララーラー…

ラララーララーララー… ラララーララーララー…

ララララー ララ ララ

ラララ…ラララララ ラララ ララーラ…

ララ ラララララ ラララ ララーラ…

ララ ラララララ ラララ ララーラ… ラララ ララーラ…ラ
ラララララーラ…」

歌は終わったらしく、ふうっと息を吐くログ

確かに心が回復した。・・・そんな気がした

ログは瞼を閉じると、意識を闇に落とす

ラグに至っては、さっきの歌で眠ってしまったらしい

おさない兄妹は、互いを抱きしめあいながら眠りにつく

「おやすみ、ラグ ログ。君たちは心を使いすぎた・・・」

静かになった洞窟にゴーシュの声が響く

「母親か・・・あんな感じなのか？」

眩きながら懷から一枚の写真を取り出す

「ラグの心に影響されたかな・・・心配になって会いたくなってしまうた・・・」

写真に写っているのは、銀髪に暗褐色の瞳を持つひとりの少女だった

(シルベット・・・)

声には出さず、心の中で写真の少女の名を呼ぶ

ざー……

雨音の中に聞こえる音

ずさっずさっずさっ

なにかが地面に刺さる音、何かが歩いている音が聞こえる

しかし、それは人間ではない。大きな何かがこっちへ向かってきている……

だんだんと大きくなる音。ああ、これは鎧虫だろうか……

洞窟の中では、ロダとゴージュが音に気づき立ち上がっている所だった

「・・・この気配は・・・」

ゆっくりと出口へ向かって歩く。相変わらず空は泣いていたが――

「・・・・・・・・」

違っていたのは、台地が大量の鎧虫で埋め尽くされていた事

「花火のようにあれだけ心を放出したのですから、鎧虫たちが引き寄せられるのも

無理ありませんね。」

隣でロダが心配そうに鳴く

「ありがとうロダ。でも、さっきログの歌を聞きましたし僕は大丈夫ですよ」

ゴーシュは銃を構えなおし、鎧虫の方を向く

「酷い残業ですが・・・仕方ありません」

その言葉に反応したように、一匹の鎧虫は大きく声を上げる

「仕事・・・ですから。」

心弾銃が素早く装填された

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

リンゴーン・・・リンゴーン・・・

鐘を鳴らす大きな教会

（またここ？）

・ ラグの意識は最初と同じ場所に来ていた。でも、違うところが少し・

（ここ・・・は？）

ログの意識も来ていた事。

（えっ？ログも来たの！？）

（あっラグ・・・）

二人の会話の後、風景が変わる

（町全体が黄昏色だぁ・・・）

夢の中でも声を重なるラグとログ。あるいみ凄い（笑

街の中には様々な人。様々な家

（こんなに沢山の人がいる・・・）

二人の思うことは同じ

街のある市場にテガミバチが二人いた

（あっ・・・ゴーシュがいる）

（ログ初めてゴーシュの事、名前で呼んだらろ

（そういえば・・・そうかも）

市場の棚の上にはあの・・・

（（ゲボマズスープ！/ですね・・・。）

が、重ねてあった

『この缶スープ、二十個ください！』

叫んだゴーシュ。・・・ここで間違ったのか・・・

『ええ？こつちの方が良いと思うけど・・・』

その隣にいるのは金色の紙をした一人の女性。年は・・・ゴーシュと

同じぐらいだろう

『アリア。僕はきつとこっちだと・・・』

(違いますって・・・きつとそっちの方が美味しいですよ・・・)

ログの声は聞こえない。

『ふーん』

アリアと呼ばれた女性は、ゴーシュの腕を取り組む

『じゃあそれ。私が払うわ』

ゴーシュは少し驚いたような顔をする

『ええっ？』

『昇進祝い、その1。ちゃんとしたのは、又今度ね』

ゴーシュは缶の入った袋を受け取る

『あつありがとう、アリア・リンク。』

アリアは瞳に涙を浮かべる

『寂しくなるけど・・・ゴージュ、頑張ってたから・・・』

『アリア・・・』

『おめでとう』

その言葉で景色が変わる

『昇進・・・？』

言葉を発したのは一人の少女。

『そうだよシルベット！次の配達が終わったら、此処ユウサリから首都曉に栄転だ！』

しばらくは一緒に暮らせなくなるけど・・・すぐに呼び寄せるからな。

むお前に貧しい思いはさせないよ。曉で兄さんは、必ずヘッドBEEになってみせる。

ヘッドBEEになれば、お前の足も治せる。すごいお金が稼げるんだ！

働いて働いて、稼ぎまくるぞ！！」

ゴーシュが視線をシルベットに戻すと、そこにシルベットはいない

『シルベット・・・？』

彼女がいると思われる方向へと歩いていく

シルベットはベランダにいた

こつこつ・・・ゆつくりと歩み寄っていく

『うつ・・・ひつく・・・』

シルベットは泣いていた。ゴーシュが来た事に気づき振り返る

『！・・・シルベット・・・』

驚いたゴーシュはシルベットの涙を拭くように手を差し伸べる

その手を握ると・・・

＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

「んあ……」

再び起きたラグ。隣ではログが静かな寝息を立てている
二人は寝たときのままの状態で、互いに抱き合っていた

「……可愛い……」

ラグは誰にも聞こえないような小さい声で呟く

「別にいつか……」

そう言ってログの頬に手を添える

そして、顔を寄せると……

「おきなよログ。もう朝だよ」

——と言って、軽くキスをした

五秒後……

「……おはよう……」

ログが、ゆっくりと瞼を開けた

そして

「ラグからなんて……初めてだね」

そう言って微笑んだ

二人は体を起こし辺りを見回す。ゴーシュの姿がない

「ゴーシュ？」

呼んでも返事はない。聞こえるのは、誰かの泣き声だけ

「ログ、立てる？」

「うん。」

ログに手を差し出すと、素直に握り立ち上がる

「やっぱり・・・ヤダ」

「えっ何g・・・」

何が？と聞こうとしたのだが、その前にラグはログを横抱きにする

「ありがとう・・・」

「別に」

外に向かって歩いていく。歩いていくほどに大きくなる誰かの泣き声

「あっ・・・ゴーシュ、ログ・・・」

「大丈夫でしょうか・・・？」

まず初めに見たのは、疲れ果てて寝ているゴーシュとロダの姿

二人は視線を外し、外を見た。そこにあっただのは

「っ!!」

大量の鎧虫のガラクタだった。

「『ゴーシュ・・・』」

二人の小さな声は、すぐに何処かへと消えた・・・

手紙とテガミバチ

完（後書き）

やっとー終わりました！

文字数は、 1 3 6 6 6 文字！頑張りました！！

それでは、次回。「僕の友達」をお楽しみに！！

僕の友達 完

ゴーシュ達は、谷の上を歩いていた

「ねえ、ヘッドBEEって何？」

ラグは急にゴーシュに訊いた

ゴーシュの足は止まり、ラグとログに視線を向ける

「昨日の僕の心弾で、何か見たのですね」

ログは大きく頷く

「ねえ、教えてよ」

ラグはもう一度訊いた

「ヘッドBEEは、我々BEE「テガミバチ」な最高称号者ですよ」

二秒後

「「テガミバチの大将って事ノですか？」」

声を発するタイミングまでぴったりと合わせ、訊いてきた

「ええ、まあ……。彼に運べないテガミは無いといえますから」

「ですが、配達レベルうんぬんはともかくとして、

もし人間を運ぶときに、そのテガミがこの上ないほどいう事を聞いてくれなかったら

運ぶも何も、まず付いて来るかどうかが難しいのでは？」

ひと時の沈黙

「確かにてこずるかも知れませんが、そういうテガミを包めて運べない者は無いんですよ」

へーっと関心するログ

「ヘッドBEEは国家の重大機密のテガミを運んでいます。」

僕もまだお目にかかったことはありません。僕らテガミバチの憧れ・・・かな」

遠くの空を見ながら話すゴーシュの表情は少しだけ、曇っていた

「ふーん」

ラグはログの手を引いて、止まっているゴーシュを通り過ぎる

「他に・・・何も、見てないですよ・・・ね？」

恐る恐る訊いてきたゴーシュに、ラグは不適な笑顔を見せた

「何ですかその顔は！」

ゴーシュが声をあげると、今度はゴーシュの前を通り少し高くなつたところの上に

飛び乗った。ログを抱えてだが、抱える時間が見えないほど早く抱えていた・・・

ある意味すごい。飛び乗ると、ゆっくりとログを降ろす

「シルベットって子、可愛いですね」

ログは微笑みながら言った

「いいや違うね！ログの方がぜーったい、可愛いもん！！」

「えっ？そんな事ないよ」

「とにかくログは、可愛いのに！そいやあ、シルベットって子、年幾つ？」

「七つです。そういえば、ラグと同じ年ですね」

「あの・・・私も」

「ええ！？ログはもう少し上じゃないのですか！？」

凄じい驚きよう。七つだとは思っていなかったのだらう

「言いませんでしたっけ？私とラグは双子で、ラグが私の兄です」

そつえば隣でピースをするラグ。

「そうでしたか・・・って、妹の事まで!？」

また驚くゴーシュ。この人は驚いてばかりだ

早足に歩いていくゴーシュに

「ゴーシュは、アリアっていう人が好きなんですよ？」

そう言った

ゴーシュが機能停止したかのように、びくりと止まる

ラグはログを抱えて飛び降り、ゴーシュの前に立つ

「ねえ、付き合ってるの？」

嬉しそうに笑った

ラグが歩いていくと、ログも後ろをついていく

「ねーえーもうチッスはした？チッスは？」

離れたところからラグが叫ぶ・・・と

「キスのことですからね？」

ログの説明の叫びの聞こえてくる

———どちらが上なのか・・・

ゴーシュは呆れたようにため息を吐く

「これだから子供は・・・って、ログは違いますけど」

少し暗くなっていた時だった

「なれるよ。ゴーシュはヘッドBEEに」

「えっ？」

突然のラグの声

「そっといえば隣のパイヤのおばさんが言ってたね」

ログの声も。そして

「「嫌なやつほど出世する／ってね！」」

二人の声は重なった

「・・・！ゴーシュさんの事ではないですよ！！すみません・・・」

「別にいいよ。っていうか、今の完全にゴーシュの事だし」

誤るログだが、ばつさりとラグに切られてしまった

「ほお・・・」

ゴーシュの苦笑いがはっきりと見えた

焚き火の火が明るい

「ふわぁ・・・」

ラグは大きく欠伸をしながら布を持ち、近くに寝転ぶ

「.....」

唯一人、ログが燃える火を見つめていた

ゴーシュは静かにログを見つめていると、ログが歌いだす

「燃える火は魂そのもの荒野を彷徨う魂

魂は見捨てられて一人きりで迷うだけ

助けを求めてもその声は届かない

誰も貴方達を見はしない

皆しらんぷり皆しらんぷり

だけど私は気づいてみた

きつと善なんて偽善にすぎない

ならば私は道しるべになろう

悪だからと悪いと決め付けて

離れていくなんて貴方は何様？

魂は叫ぶ助けてくれと

だから私は答える

この魂を犠牲にしても

きつと・・・きつと・・・未来は

明るいはず——なんて

夢に過ぎないよ分かってるんだ

そんな事ありえないだって・・・

私達は人なんだから——」

何か物悲しげに歌ったログはゴーシュの方を向く

「今の・・・誰に向けての曲だと思いますか？」

ゴーシュは首を傾げると分かりませんと答える

「この曲は・・・死んだ恋人への曲なんです

死者の事はあまり人は引きずりません・・・だって人だから

そんな忘れ去られた魂たちへの贈り物なんです」

炎に触れるように手を近づける

—— ログは燃え盛る炎の中に腕を入れた

「！——やめなさい！！」

ゴーシュが驚いて立ち上がるが、ログは笑顔を見せた

「大丈夫ですよ。炎は荒野で迷子になった魂なんです

人間は勝手に呼び出しておいて感謝もしない

それどころか、魂達の存在すら知らないから魂が怒るんです

でも、存在を知り、愛をあげれば・・・」

そっついながら腕を上げる

「魂達は怒らない。害を与えない」

ログの腕には、傷1つなかった

「きつとなんてあいまいな言葉・・・誰が考えたんでしょうね

絶対なんてきっぱりとした言葉・・・誰が考えたんでしょうね

思い浮かべれば疑問ばかりですが・・・この世界だからしょうがない
りません」

ゆっくりと笑みを深めると、ゴーシュを真っ直ぐに見つめる

「明日・・・ラグは貴方の心弾銃を持って逃げるでしょうね

暁に連れて行ってとせがむと思います

私は有無を問わずラグに付いて行きますが・・・ゴージュさん必ず追いかけてきて下さい

貴方が・・・必要になりますから」

最後には何処か遠くを見つめるようにして、ログが言った

「では・・・おやすみなさい」

ラグの隣に寝転ぶと少しだけ布を引っ張る・・・と

「ん・・・」

無意識にラグが布をログにもかける

それから崖を登って・・・

ラグが強がつてゴーシュの手を借りなかった

でもログは素直に手を借りて上へと登った

それから川を見つけて・・・

上には黒い悪魔みたいな鳥が飛んでた

ラグはログの手をぎゅっと握り締めて瞳を輝かせた

ログも握り返し瞳を輝かせた

それから温泉を見つけて・・・

ログがずっと歌ってくれた

ラグは嫌がるロダを無理矢理引き入れようとしてて

ゴーシュは笑ってた

同じように燃える焚き火

「ゲボマズ」

「我慢して下さい、他に食料ないんですから」

「そうですよ。しかも、もう調味料はありませんし」

ラグが顔をしかめる

「もうゲボマズスープやだあ」

「・・・仕方ありませんね・・・」

ゴーシュが静かに立ち上がった

岩陰に隠れて身を隠す

向こう側には白い動物・・・食料

「今日こそは・・・いただきます!!」

勢いよくゴーシュがとびかかる・・・が、捕まえられない

「ふぎゃ!」

ラグも飛び掛るが・・・又も逃げられる

「・・・・・・・・」

そんな二人をログとロダが見ていた

「・・・・・・・・」

結局ゲボマズスープを飲んでいる二人の前に・・・

「あの・・・捕れたよ、さっきの動物・・・」

二人が捕まえられなかった動物をラルトとロダが捕まえていた

又同じように布を持って近くに座る

「おやすみ・・・」

ラグが寝転ぼうとすると

「まってラグ。今日は冷え込みます、僕寒いのが苦手で・・・

今日は僕達と寝てもらえませんか？もちろんログも」

ラグは少し頬を赤らめると

「別に・・・いいよ」

了承した。ログも勿論了承してくれた

「星が思ったよりも明るい。配達は順調ですよラグログ

このままいけば明日中にはキャンベルの街に着くと思いますよ」

ゴーシュが夜空を見上げながら言った

「え・・・明日？」

ラグが驚いて言うと、ゴーシュはこくりと頷く

ラグは黙るとログを抱いて布に包まり寝転ぶ

「ラグとログは、誰かにテガミを書いた事がありますか？」

「ないよ・・・そんなの」

「私はあります。・・・と言っても、魂に向けてですけど」

二人が答えると、ゴーシュは瞳を細める

「なら、いつかは書いてみて下さい。」

「なんで？いいよ、テガミなんて・・・」

そっけなく答えたラグに方をゴーシュが向く

「たった一言でもいいのです。それをもらって、嬉しくて涙を零す人もいるのですから」

「たった一言で？」

ラグの疑問にはログが答えた

「うん。一言だけでも、嬉しいものだよ手紙は

前にある魂にテガミを書いた。その魂は寿命で無くなった老婦の

魂だったんだけど・・・

孫にそけなくされて、悲しいままこの世界から消し去られた

私はその魂に一言、『私は貴方達が大好きです』と書いたら

泣いてくれた。こんな私のために・・・」

自分が必要な人間だと思っているログはどこまでも自分を下に
見ていた

「離れている人にとってテガミは、心そのものなのですよ。

それにログ・・・君からのテガミはこの上ないほど素敵なのでし
ょうね」

ゴーシュが言うと、ログは瞳を見開く。そして微笑んだ

「ウォンウォーン」

ロダが沈んだ空に向かって吠える

「うわあゝ」 「綺麗・・・」

ラグとログは同時に立ち上がった

「ジョセの白砂漠に咲く、チップ花の花です。山道も、もう終わり
ですね」

二人が少し遠くを見つめる———と

「「光りが・・・」」

そこには霞んで見える幾つもの光り

そこはきつと・・・人が住んでいるのだろう

・・・首都暁

「「・・・あんな遠くに」」

ラグの声はしだいにきつくなっていくが、ログの声はしだいに弱弱しくなっていく

「テガミがなんだよ・・・じゃあ、お母さんには何処へ渡せば届くんだよ！」

ラグは押さえきれなくなり、涙を流す

「キャンベルにつけば、もう二度とお母さんと会えなくなるんだぞ！？」

「・・・」

ゴーシュに叱声を浴びせるが、優しくログを抱きしめる。

ログはただ、悲しそうに顔を歪めてラグの胸に顔を埋めるだけ

「ゴーシュはこれから暁に勤務なんだろ？」

だったら・・・僕達を、首都に・・・暁に連れてって！！

暁に行けたらお母さんを連れ去った連中が誰だかつきとめられる
！！

お母さんも見つけ出せる・・・！！

だからゴーシュ連れてってよ！！」

ラグの必死の叫びは乾いた空気に響いた

「・・・ラグ、君は心弾で僕の記憶に少しふれただけですから、そんなバカな事が言える

かもしれませんが・・・君には分からない、この通行書の重みが
ね」

ゴーシュは一枚の髪を見せる

「重み・・・競争率の高い中、必死の思いで仕事をこなし、自分の
為ではなく他の人に為に

暁へと行く。大切な人に寂しい思いをさせ、いつになるか分からない日を待たせる

・・・これが人間。逃れられない我儘な思考・・・」

珍しくログの声は怒り混じっていた

「何がいいんですか？」

その言葉にゴージュは顔を引きつらせる

体が震える。見事に射抜かれてしまったのだ。自分の中の思いを

しかし、ログの普通では無かった

瞳は虚ろ、体は小刻みに震えている

「私は貴方に言っただけ。この子に感謝しなさい、人間

私達は人間じゃない。デビル エンジェル ゴースト悪魔や天使や幽霊

唯、人間の中で一人この子だけが私達に接してくれる。

まあ、自分の愚かさをとくと後悔しなさい人間」

その言葉を最後に、ログは崩れ落ちた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

息は乱れ、明らかに苦しそうだ

そんなログを見て、ゴージュが言う

「君達は僕の友人ではないですから、願いは受け入れません」

ラグは瞳を見開いた

「僕達と・・・ゴージュは・・・友達になれないって事？」

「僕の仕事は、君達に傷ひとつつける事なく届ける事唯一つです」

ゴーシュの声は凍るほど冷たかった

「嫌いだ・・・お前もテガミバチも大嫌いだ!!」

「別に好きになってもらわなくても構いません。今日は寝なさいラ
グログ」

泣いている二人に、強く言ったゴーシュだが、先程のログの言葉に
深く傷ついていた

今まで自分の信じてきた事が、見事に崩れ去ったのだから・・・

・ 「せいぜい足掻くがいい・・・この人間風情が・・・お前達はいずれ・

私達が消し去る・・・この子とこいつを除いてな!!」

ログはそうつとはち切れる様に倒れた

静かな荒野

ゴーシュが目を開けると、そこにはロダもログもラグも心弾銃も無かった

「・・・やられました・・・」

頭を抱えるが、一昨日のログの言葉を思い出す

「追いかけてきて下さい・・・か。」

ログは先を見越していたのかもしれませんが・・・

僕は酷い事をしてしまった・・・彼女が心を見失うくらいに傷つけてしまったのだから・・・

「ごめんなさいログ。僕は君を・・・信頼している。」

謝罪の言葉を述べ、ゴーシュは立ち上がった

「なんだよあの冷血漢。仕事仕事、ですからですからって、信用しかけた僕がバカだった」

心弾銃を手に持ったラグと、隣で静かに歩いているログ、後ろでついて行くロダがいた

「見てろよ。このへんてこ銃で大暴れして、橋なんて強行突破さ

何が通行書の重みはぐつだ！！そんなのなくつたって、曉までたどり着いてやる！」

「ラグ、へんてこじゃなくて心弾銃。

私・・・酷い事言つてたみたいで・・・」

「別にログは悪くないや！」

怒鳴るラグと落ち込むログ。本当に対照的な双子だ

「ついて来るなよログ」

八つ当たりでもするかのようにログにはき捨てると、ログの手を引いて数歩歩いた

ビュオー・・・ザーサササー

少し荒い風が吹き、辺りの土を舞い上げる

何かを感じたように耳を動かすログ

「あれ？来るときこんなとこ通ったっけ・・・？」

ラグがそう呟いた時

ずざざざざざざざざざざざ

二人の真下の地面が落ちた

「うわああああああ」

茶色い煙の中に二人は消える・・・が、すぐに煙は晴れる

「けほっけほ・・・」

「げほっ・・・大丈夫？ログ」

「なんとか・・・」

この場面だけを見るとラグは兄に見える。しかりとログを抱え守ったのだ

「ふぉえ？」

今の状況をイマイチ分かりきっていないログは、混乱したように首を傾げる

つとその時

ぎゃううううううううううううううう！！！！

下から盛大な泣き声が聞こえてくる

まるで空気のガラスを割ったように響く声

「何だ・・・？」

「！！鎧虫・・・」

二人を襲ったのは鎧虫だった

必死に上へ上がろうとするが、アリ地獄らしく上がれない

鎧虫は二人に狙いを定め、そして・・・

ビュオッ

空間を切り裂きながら鎖に繋がれた槍を撃ってきた

「うわっああっ」

「っ・・・」

ラグとログが目を瞑ったとき

「ラグ！ログ！」

間一髪でゴーシュが二人を守った

誰かの血が空を舞う

「ゴーシュ！」

上へ向けば、一生懸命ゴーシュの持っているマフラーを加えて持ち上げているロダ

「ロダ！」

そして、隣で二人を庇うように腕を伸ばし、深くえぐられている口グがいた

「！口グッ！？」

「ははっ・・・ちょっと無理しちゃった」

ラグが叫ぶとログはへらっと笑う

額に浮かぶ汗を見る限り、大丈夫なはずはない

ざっ・・・がたんがたん

不気味な音をたてながら鎧虫は放った槍を引き戻す

「落ち着いて二人とも。あれは鎧虫ブッカーズといいます

次撃つまでに時間がかかります

ラグログ、銃を構えて！」

「「えっ？」」

疑問気にゴーシュを見上げるラグとログ

「僕が引き金を引きますから、しっかりさせてください！」

「「うっうん！／＼はっはい！」」

ゴーシュの言葉に二人は頷くと、心弾銃をしっかりと構える

ぱああああああ

すると、精霊琥珀が眩い光を放ち始める

（どういつことだ・・・？又精霊琥珀の力が上がっている！？）

異様な光景に、ゴーシュは驚いていた

「装填・・・黒針！」

前の様に、銃口からは黒い炎が噴出す

弾はブッカーズの放った槍を避けながら、直撃する

ぶわつと土ぼこりをあげた

同時に放たれた槍で、ゴーシュは右腕に怪我を負う

土ぼこりが晴れると、そこには傷ひとつ無いブッカーズの姿

「ええっ？効いてないよ！」

「ここからでは間接の隙間を狙うのは難しいですね・・・

やはり思い切るしかありません」

ゴーシュのマフラーを握る左腕に力が入る

「下あごの槍を撃ってきたと同時に、突っ込みます」

「だめだよゴーシュ！そんな大怪我してるのに・・・」

「そうですよ！危なすぎます！！！」

二人は必死に止めるが、ゴーシュは微笑むだけ

「大丈夫です。君達は、無事に送り届けます

君達に込められた希望と想いは絶対」

ゴーシュがそういい切ると、ラグとログは涙を流す

「「ゴーシュ・・・」」

「ラグ男の子ならしっかりと支えていてください

ログはしっかりとラグを支えてあげてください！」

ゴーシュがいい終えたのと、ブッカーズが用意し終えたのは同時だった

「来ます！！」

その瞬間にマフラーを離し、斜めの斜面をすべり降りていく

「心弾装填・・・」

ゴーシュが指を掛けた時だった

今までに無い強い光りが三人を包み込む

（なんだ！？この光りは・・・）」

ふと二人を見ると、ラグは左目ログは右目に赤い精霊琥珀の義眼が

埋め込まれていた

（まさかっ！？赤い精霊琥珀の義眼・・・！？）

そうか、心弾銃の力が上がっていたのはラグとログの目に共鳴していたから・・・）

ゴーシュが考えていると、ブッカーズに殴られ離れてしまう

「しまったっ！・・・ラグログ！！」

二人は涙を流しながら必死に心弾銃を構える

「そのまま・・・撃てー！！！！」

「っっ！！！！」

叱声により二人が引き金を引くと

真っ赤な炎が撃ちだされる

その弾は真っ直ぐにブッカーズの口に吸い込まれそして・・・

グワシャン！！

鎧虫はガラクタになりながら、宙を舞った

ぱああああ

眩い光が辺りを包み込む

現れたのは、大きい画面のような何か。その何かに女の子が映し出される

『お父さんもお母さんもなくていいから、足も治らなくていいから・・・』

どこにも行かずにここにいて・・・お兄ちゃん・・・』

シルベット。彼女は泣きながらゴーシュの手をつかむ

「・・・っ！」

ラグは驚きのあまり動けなくなるが、優しく・・・しかし強く口グを抱きしめていた

ざっ・・・ざっ・・・

布を引きずる様な音が荒野に響いていた

ロダが歩いている後に、ゴーシュを背負ったラグとログがつづく

「何を・・・しているので・・・すか・・・」

苦しそうにゴーシュが問う

———　　つと、ラグが答えた

「テガミは・・・心、だし・・・希望、ですから・・・」

瞳からはとめどなく涙が溢れ出す

ログも同じように、泣きながら歩いている

っが、歯をくいしばる様子を見るとかなり苦しそうだった

じわりと、ログの右腕に巻かれた布に赤黒い血が滲み出る

「ログ・・・大丈夫？」

その様子にラグが心配すると、ログは笑顔で

「大丈夫。まだ・・・全然」

そう答えた

必死に胸のうちに叫んでいるのに

「ラグ・・・ログ・・・僕の心にも、響きましたよ・・・」

ゴージュは瞳を閉じて、意識を闇へ落とした――

リンゴーン・・・リンゴーン・・・

綺麗な音を鳴り響かせる教会のベル

ここはキャンベル・リートユスの街

窓の外からの音が、少し聞こえる程度の部屋の中

ベッドに寝ているゴーシュと、傍らにいるラグとログがいた

ゴーシュは目を覚まし、起き上がる

「ここは・・・ラグ、ログ。」

隣を見て、眠る二人の姿を確認する

「やっと目が覚めたかい」

話しかけてきたのは、一人の女性。サブリナ・メリーさんだ

「ここは？」

「ここはキャンベルの港町だよ」

サブリナの言葉に一瞬瞳を見開く

「ということは・・・」

「そうだよ。このチビ達が何十キールもあんたを担いで歩いてきたのさ」

あんたはラグとログに感謝することだね」

「あの・・・あなたはサブリナ・メリーさんですか？」

「ああ」

「そうですか！」

声を弾ませてゴーシュが鞆から何かを取り出す

「ではこの受取書に、はんこかサインをお願いします」

ゴーシュが笑顔で言った瞬間だった

バン

荒々しくドアが開けられ、ゴーシュは追い出されていた

「とつとどこから出ていきな！」

何がまずはんこだよ、心のない男だね。まずは、三日三晩付きっ切りで看病した

ラグとログに感謝するのが先だろう。これだから都会のやつは・

「

ゴーシュに怒鳴るサブリナに、ラグとログに抱かれているログは困った表情をする

「「サブリナおばさん・あの」「

「あんた達は黙つときな」

ラグとログの言葉は綺麗に阻止された

「とつととユウサリでも暁にでも帰れ。このバカテガミバチが！」

受取書をゴーシュに投げ捨てて、ドアを閉めた

『あいつだぜユウサリから来たって言う・・・』

ゴーシュが歩くたびに聞こえる声

「あの・・・水と食べ物を買って欲しいんですが」

「あいにく今日は何もねえな」

冷たく言われたが、ゴーシュはめげない

「でも、それは売り物じゃ・・・」

「あんたに売るものなんか、この街にはねえよ！」

最後には怒鳴られる形で閉め出された

キャンベルの街が見渡せる丘で、大きなため息をつく

「どうやら僕達は、歓迎されていないようです・・」

すると、何か袋を持ったラグとログが歩いてきた

「ここは外交からの海賊船も多いから、皆告げ口されるのを怖がってるんだよ」

「別に、嫌われてるわけじゃないから」

ラグは水色の服に白いズボン。ログは水色のワンピースに白いハイソックスを着ていた

初めて見るログの髪を下ろした姿。彼女は温泉に入ったときも髪は結んでいた

「ラグ・・ログ・・」

「これ、水と食べ物。サブリナおばさんが持っていって」

「ゴーシュのゲボマズスープよりも、美味しいですよ」

二人は微笑みながら言った

「おばさん本当は良い人なんだノです。ただテガミバチの大変さは知らないからノりませんから」

こうして見ると、二人はやはり兄妹だということが分かる

「あの方・・メリーさんなら、僕の友達をととても大切にしてくれるでしょう。安心しました」

その言葉に二人は首をかしげる

「友・・達？」

すると、ゴーシュが二人に近づき目線を合わせるように屈む

そして二人を暖かく、優しく抱きしめた

驚きのあまりラグとログが瞳を見開くとゆっくりと話し出す

「もう配達は終わったんだよ・・ラグ、ログ、君達は本当によく頑張った

よく乗り越えた。僕らは共に助け合い危険な旅を終えたんだ」

ゴーシュの言葉に目じりが熱くなる

「君達はもうテガミじゃない。立派な人なんだ、ラグ・シーイング。ログ・シーイング」

「じゃあ・・・もう・・・友達？」

「友達なんですか？」

鼻をすすする音から、二人は相当泣いている事が分かる

「ああ。友達だよ」

前の様な冷たい声ではなく、母の様な暖かい声音

「「友達？」」

「ああ。口ダもね」

その言葉で二人の何かは吹っ切れた

「うわああああゴーシューー！！！」

「ぐすつ・・・あう・・・」

二人は大きな泣き声を響かせて泣いた

「じゃあねロダ」

「元気でね」

門の前。ゴーシュが発する寸前

ラグとログはロダを抱きしめていた

「「赤い目はお母さんがずっと大切にしていたもので、僕／私が生

まれたときにかかった病気

を治す為に使ったって言ってた／ました。」

歌りが話していると、少々耳障りな音を立てながら木製の門が開いていく

「でもね、この事は誰にも話しちゃいけないって。

心から信頼できる人にだけ、打ち明けなさいって……」

「ありがとうラグ、ログ。その石は精霊琥珀を知っている者にとつてとても価値のあるものです

狙われないように気をつけなければね」

「うん／はい」

大きく頷くと、背の高いゴーシュを見上げる

「暁に着いたら、ラグとログのお母さんの事についてもすこし調べてみます

もしかしたら見つける手がかりがあるかもしれません。」

少し歩いて、ゴーシュは二人の方を向く

「これでルートは出来ました。遅からず他のテガミバチがテガミを運んでこの街を訪れるでしょう

さよなら、ラグ・シーイング。ログ・シーイング」

その言葉を最後にラグ達に背を向けて歩いていく

っと、その瞬間に門も閉まっていく

「「さよなら・・・ゴーシュ・・・」」

門が閉まっていき、ゴーシュの頭が隠れそうになった時にラグは叫ぶ

「あのね・・・僕思ったんだ。いつか・・・貴方のような・・・テガミバチになりたい！！！！」

ラグが言い切った瞬間、門は完全に閉まりきった

門の前には涙を流しながら、しかし微笑みながら手を振っている二人の兄妹が残った・・・

５年後・・・

リンゴーン・・・リンゴーン・・・

いつもの様に鳴り響く綺麗な鐘^{ベル}の音

暁の光が見える丘にラグはいた

・・・ログの姿は見えない

ラグは白いシャツに青いズボン。青いヘアバンドを付けていた

相変わらず左目の義眼を隠すように前髪で隠してある

「ゴーシュ・・・少しだけ、近づけそうです」

暁に向かって呟く

「お母さん、ゴージュ、待ってて」

声は幼いながらも、5年前よりは幼くない

顔つきも、少しだけ幼さが抜けている

ラグの髪を優しい風が撫でる・・・と

「ひゃうっ」

後ろで綺麗なソプラノ音が・・・

「吃驚したぁ・・・」

地面にペタンと座り込んでいる姿はまるでお姫様とでも言えそうだ
・・・12歳になったログだ

銀髪の髪は伸び、青いカチューシャを付けている

クリーム色の服に白いワンピース。青いハイソックス

顔つきは・・・なんというか可愛い。少し幼い顔だ

ログも変わらず、義眼である右目を前髪で隠している

手に持っているのは・・・バスケットの中に入ったパン。彼女が作ったものだ

「大丈夫？ログ」

ラグが少し微笑みながら座っているログに近づく

「うん、大丈夫なんだけど・・・」

「大丈夫なだけで？」

ラグが訊くと、ログは満開の笑顔で

「抱っこして？」

つと言った。照れている様子は全くない、恐ろしい天然ドジ子

「えっ？えと・・・うん／＼／／」

対照的にラグは少し照れてからログの手を引いてぎゅっとした

「あつ、えつとね、パン焼いたから持ってきたの」

「本当？ありがとうログ。ログのパン美味しいもんね」

にこつと笑いあう

「必ずテガミバチになって、暁に行くからね」

ラグが言うつ、ログはふふつと笑う

「そうですね。行けますよ、ラグなら」

まるでその言葉を発するのが分かっていたように

リンゴーン・・・リンゴーン・・・

二人を教会の鐘が包んだ・・・

泣き虫兄妹、テガミ少女

いつもの丘の上、二人はじゅっとう遠くを眺めていた

「……………あつ」

ふいにログが声を出す

「どうしたの？ログ」

ラグが不思議そうに訊くと、ログはいきなりがばっと抱きついた

「ええっ！？／＼／」

驚くラグそっちのけでログは嬉しそうに笑った

「来ましたよ！」

ログの言葉でラグが荒野の先を見ると、土ぼこりを上げながら何かに向かってきていた

「本当だ・・・来た！」

先程の反応とは違い、ラグはログを抱きしめる

「頑張ろっね・・・ログ」

「はい。頑張りましょう、ラグ」

兄妹は強く、しかし優しく抱きしめあう

所変わって灯台

「おつあれだあれだ」

三人の男のうち一人が望遠鏡で土ほこりを覗く……と移ったのはのほほんとした馬

「ってなんだあの馬。」

望遠鏡を覗いたままその人は話し始める

「それにしても、この街から国家公務員になろうと言い出す物好きがいるとはなあ」

すると、一番左の男も話す

「それを言うなら、この街から一時検査を通るほどのできのいいやつがいるとはなあだろ」

今度は真ん中の男が話す

「今度はユウサリで面接やって・・・」

少し顔色が悪くなる

「うわぁっわしぶるぶるしてきたわぁ・・・」

望遠鏡を目から外し

「お前関係ないし」

ツツコミを入れた

「おーいっお迎えが来たみたいだぞ」

左の男が大きな声で言うと、下の一人の女が手を上げて応える

かっかっかっか・・・

その女の人の走る音が街中に響く

女の人は1つの家のドアを開けた

「サブリナ。お迎えが来たってさあ。」

サブリナ・・・サブリナおばさんは編み物をしている手を休めずに

「ああ、そうかい」

つと返事をした

呼びに来た女の人は少し呆れたように溜め息を吐く

「ああそうかいってなんだよ・・・あれ？当の本人達は」

やはり手を休めずにサブリナは答える

「ラグとログならいつものところだろ」

女の人は分かったのか納得したように

「ああ、あの崖の上ね・・・って」

つと言いかけて、また呆れた

「もうどうして三人揃って、そう暢気でいられるんだい

お迎えのテガミバチがもう来てるんだよ？」

テガミバチ・・・その言葉でサブリナはやっと手を止めた

「テガミバチね・・・」

何かを思い出すように、目を細めた

ざー・・・

空はご機嫌ナナメ。どしゃぶりの雨が降っている

そんな中だ

どんっどん・・・どんっどんっ

サブリナの家のドアを誰かが叩く

「すみません・・・すみませんっ」

聞こえてくるのは幼い声二つ。一人は男一人は女

「いったい誰だい、こんな時間に・・・」

サブリナは少し悪態を吐きながらドアを開ける・・・と

雨に濡れたテガミバチ・・・ゴーシュと

「テガミバチ・・・あっ・・・」

「サブリナ・・・おばさん・・・」

雨に濡れてへとへとなのに、必死にゴーシュを背負うラグとログだ
った

「あんた・・・ラグとログかい!？」

サブリーナの言葉に、ラグとログな泣きながら頷く事しか出来なかった

机に座って、ラグがサブリーナに旅の話をしていると、ログが起きてきて・・・

「・・・ラグ・・・」

ラグに抱きついた。

ラグは少しだけ頬を赤くしながらも、自分の膝の上に座らせて、また話し始めた

「お座り！」

ラグがめんどくさそうに座っている犬に言うが、全くびどつだにしない

「おすわりだってばあゝ」

「ラグ・・・ファイトツ・・・」

「もうすっかりあんたの子供みたいだねえ。」

「はあ・・・手ばかりかかってしかたないよ」

サブリーナ達が話している間に、ログが犬にいう事を聞かせられてのはラグしか知らない

机にランプを置いて、仲良く並んで勉強するラグとログ

「ラグ、ログ。そろそろ寝ないと体に毒だよ」

「「もう少し・・・」」

サブリーナが呆れたようにふうと息を吐いた

「あんた達、そんなにテガミバチになりたいのかい？」

「うん」

ラグは即答するが、ログは少し黙る

「うん・・・」

確かめるように頷きながら、ログも答えた

「はぁ・・・」

ため息を吐きながらも、サブリナは嬉しそうに微笑んだ

机の上に置いてあるテガミ

「おばさんっおばさん！一次試験に合格したよ！」

ログを抱き上げながら喜ぶラグ

「そうかい。よく頑張ったねラグ、ログ」

「ふう・・・全く早いもんだよ」

出来上がったものを持ち上げて、サブリナは立ち上がる

「なんとか間に合ったみたいだね」

リンゴーン・・・リンゴーン・・・

鐘がよく聞こえる広間に、皆は集まっていた

「これ、ホピロクさんの漢方薬ね。こっちはハンさんに頼まれてたドエツチな本」

「うつ」

「あんたあつ!!!」

テガミバチである彼は、皆に持ってきたものを配っていた

・・・ピザを食べながら

「ありがとう。お前さん達テガミバチのおかげで、ユウサリの物が手に入る」

「どういたしまして」

口の中のピザを飲み込みながら言った

「僕こそヨダカのサイハテで、最高に美味しいピッツアに出会えるなんて

知ってたらもつと早くに来てたのにさ。なあガス」

彼は隣にいる犬に話しかけるが、ガスはそのまま眠っている

「あんた、それ以上太っても知らないよ?」

誰かが言ったときだった

ラグとログがやってきたのだ

「わああっ」

「・・・」

ラグは嬉しそうに笑うが、ログはラグにしがみつく・・・否抱きつく

「やあラグ、ログ。二頭立ての馬車とは言わないけど、旅立ちにはなかなかだろ？」

彼の言葉にラグの笑みは深くなる

「ありがとう、コナー」

「ありがとうございます・・・コナーさん」

お礼だけはログは言った

相変わらず、ラグに抱きついていたが

あの時と同じ、少々耳障りな音を立てながら門が開く

「別れはちゃんと済ませときなよラグ、ログ。」

国家公務郵便官の面接審査。これを通過すれば、もうここには戻れないんだからさ」

「うん／はい・・・」

「これは餞別や」

ラグの掌に乗せられた1つの銃

「銃っ？」

ラグが少し驚いた声を出す

「そんな古いポンコツ使えるのか？」

「いっちょもんやで」

二人の会話を聞いた後、ラグが銃を抱える

「大切にするよ、ゴケッさん」

「ありがとうございます。ゴケッさん」

二人がお礼を言うと、三人の男の一人がログの頭に何かを置いた

綺麗な花のコサージュだ

「ログはこれからもっと別嬪さんになるだろうからな。これ使ってくれ」

ログはにさんかい瞳をぱちぱちとすると、にこりと笑った

「ありがとうございます・・・大切にしますね！」

大事そうに布に包むと、鞆の中に閉まった

「さびしくなるなあ・・・ラグとログ・・・」

「もしかしたらこれが今生の別れかも」

二人の言葉にラグとログは驚く

「やめてよ／＼ください・・・テガミバチになったら、コナー／さんの変わりに

僕と私がテガミを運ぶから」

「なぬっ」

コナーの顔が引きつったのが分かった

「それにしてもログちゃんがいなくなるんて・・・」

「ラグめ・・・羨ましい」

「えっと・・・その・・・」

みんなの言葉に戸惑うログ。自分のファンクラブが出来てる事なんて、知らないだろう

「羨ましいって・・・そうだけど」

「認めやがったな！」

ラグが嬉しそうにログを抱きしめる

ログはそれが嬉しいのか、柔らかな笑顔を見せた

「おや、サブリナはまだ来てないのかい」

「「えっ？」」

その言葉にラグとログは辺りを見回す

——その時にサブリナは青い固まりを手に持って歩いてきた

「ほお」

俯いていた為、皆が自分の事を見ていたことに今気づいたらしい

「「っ」」

サブリナを見つけた瞬間にラグとログは走り出す

見事に同じ瞬間にサブリナに抱きついた

「・・・っくらラグ、ログ・・・」

驚いたように言いながら、優しく二人の背中に手を回す

「「サブリナおばさん・・・今まで、本当にありがとう・・・」」

二人が涙を浮かべながら言うと、ふいにサブリーナが手に持っていたものをラグとログの首に巻いた

それはとても長いマフラーだ

二人は1つのマフラーに巻かれて、本当に仲良しに見える

「あんた達を運んできてくれたテガミバチも、こんな巻いてただる？」

サブリーナがいうと、二人は何かを思い出したかのように俯く

「「ゴーシュ・・・」」

「あの時は無碍にしちまったが、今度あの男に会うことが合ったら・」

ぴちゃっ

ラグとログの頬にそれぞれ一粒づつサブリーナの涙が落ちた

「言葉に出来ないほど感謝していると伝えておくれ・・・」

二人が顔を上げると、サブリーナは優しく微笑む

「このサブリーナはあの老いていくだけの人生に、かけがえのないテガミを届けてくれて

感謝しているとね」

ぶわっとな二人の瞳からは涙が溢れ落ちる

顔はうつすらと赤くなり、ログなんかは・・・萌える↑

ぐずつと鼻をすすり、もう一度サブリナに抱きつくラグとログ

「大好きだよ・・・サブリナおばさんは僕／私の・・・ぐずつ

もう一人のお母さんですっ！」「

泣いていて声はか細いけれど、二人の言葉には”心”が込められていた

するとサブリナは二人をぎゅっと抱きしめ返す

「全く・・・あんた達の泣き虫が移っちまったみたいだ

アヌに・・・本当のお母さんに会えるまで、頑張るんだよ・・・」

『必ずテガミバチにおなり、ラグ・シーイング、ログ・シーイング
』！』

荒野をがたごとと走る幌なしの馬車で、先程の言葉を浮かべながら
涙を流すラグとログ

（さようならおばさん・・・さようならキャンベル・リートユス）
）

そう心の中で呟くと、前に向き直る

つと、辺りを大量のチップ花の綿毛が飛ぶ

「うわぁ・・・凄い量の孢子だなぁ・・・」

コナーが呟くと、ラグは瞳を見開いた

「チップ花の綿毛だよ、コナー」

その時に思い出されたのは、ゴーシュとの思い出

ラグの瞳に涙が滲む。ラグは服の袖で涙をぬぐう・・・と

「・・・ラグ・・・」

隣のログがラグの顔を見つめていた

泣き虫兄妹、テガミ少女（後書き）

一回ここまでです

L

[illegible]

L

あああ

L

ああああああああ

L

ああああああああああああああああああああ

L

ああああああああああああああああ

L

あああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ

嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああ
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
ああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああ
ああああああ

「

」

嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

アクマを狩る兄妹 完

カンカンカンカン

軽快になる電車の音

「ほら早く!」

「ちょっと、待っててば!」

その中から出てきたのは、少年と少女

年は・・・幼く見える。ざっと14〜15ぐらいだろうか

少女はいわゆる美少女で、可愛いと綺麗の割合が7：3ぐらい

しかし、幼いのに髪は白髪^{はくはつ}で、右目には不思議な模様が描かれている

少年の容姿は・・・至って普通。

しかし、この少年も白髪で、左目に不思議な模様が描かれている

二人の顔はとてもよく似ていて、双子である事が分かる

少女は嬉しそうにはしゃぎ、少年は手を繋がれたまま振り回される

嗚呼、なんて微笑ましい光景なんだ・・・

ゴーンゴーン・・

光が消えいりそうな街の大きな時計台が、低くうなる

闇に支配された世界の中でも、人々は多くいきかう

その中に、食べ物を積んだ質素な馬車が走っていた

ごとつごと、という少し耳に障る音を立てながら馬車は進む

その馬車の上に黄色い鳥・・いや、黄色い鳥のようなゴーレムがとんでいた

「ティムキャンピー！ティムキャンピー！」

馬車の中から聞こえる声・・・さっきの電車から出てきた少年の声だ
ティムキャンピーと呼ばれたゴーレムは、バサバサと羽ばたく様な
音を立て

少年の頭にのる

「あんまり遠くに行っちゃ、ダメですよ」

隣にいた少女がティムに向かって優しく言う

ここで今更だが、二人の格好について説明しよう

少年は緑色のバンダナを頭に括り、茶色のコートを着ている

持っているのは小さい鞆だけ

少女は同じ緑色のバンダナをカチューシャのように縛っている

茶色いコートを羽織っていて、ミニスカートをはいている

同じく、持っているのは小さい鞆だけ

「猫に食われちゃうぞノいますよ」「」

声の重なった二人は互いに顔を見合わせ、そして笑いあふ

すると、後ろのカーテンを開け、ぬいぐるみを着た（顔だけ）二人

が何かを差し出す

熊のぬいぐるみ（顔だけ）を着た人が

「よかつたら食べるかい？」

と優しく言つて来てくれた

「ありがとうございます」

少年が受け取つて、お礼を言つと

「優しい方でよかったですね」

隣の少女が柔らかに微笑む

すると、兎のぬいぐるみ（顔だけ）を着た女の人が熊さんを押しつけて話しかけてくる

「旅行かい？」

「いえ、挨拶に行くんです」

二人はまた声を重ねる。少女は少し笑いながら、少年と腕を組む

「エクソシストの本部へ」

少年は少女の頭を優しく撫でた

青白く光る月。綺麗だが、不気味にも見える

ゴン・・・

その不気味さを際立たせるかの様に、時計台がまたうなる

『きいた？ここで何人もの人が消えてるんだって』

誰かが一つの館を指さしながら言った

『知ってるか？この館は金のない旅人がよく寝るのに使うんだ』

そして朝になると、旅人の姿は無く服だけが残ってるんだ』

男が声を震わせながら話した

『呪われてるんだよ・・・だって此处二年前にも・・・』

女の声も次第に震えてくる

コツコツ

そんな話お構いなしに、むっとした顔を見せながら一人の女警官がその館に入っていく

「モア！本当に入るのか？」

後ろで、館へ近づいていく女警官に言う警官が一人

モアと呼ばれた女警官は男の方に振り返る

「町の人からの苦情が殺到してるの。この館で人が消えてるのなんだの」

男警官は柵にしがみつき、震えている

顔色は色が抜けたように真っ白、もしくは病人のように真っ青とでも言うのが一番合っている

「だから、呪われてるんだって！！」

必死に言うが、モアは呆れた顔をするだけ

「チャールズ？それが警官のセリフ？」

モアは館の方に向きを戻す

「どうせ誰かが流したたちの悪いデマよ」

帽子をかぶり

「ここは呪われてなんかいない」

強い口調で言い切った

チャールズと呼ばれた警官は少しの間館とにらめっこをすると

「分かったよ。いくよ」

覚悟を決めたように、柵から離れる

ぎいいいいいい

不気味な音を立てながら、古びた扉は開かれた

中に入ると、窓は割れ散々な光景だった

「うわア・・・荒れ果ててるな・・・」

チャールズが、恐怖を隠しきれてない声で言う

「こんなところに、本当に旅人が泊まったりするのかしら？」

モアは疑問を口にしながら進んでいく

つと、その時だった

「うわあああああああ!？」

チャールズが叫んだ。モアが何事かと振り返る

「足に!！」

チャールズの足にいたのは・・・

「にゃおくん」

猫

「猫よ」

モアは、チャールズの足にすり寄っていた猫を抱き抱える

その時、モアが何かに気づき顔を上げる

すると・・・

きゃーきゃー

可笑しな、しかし不気味な鳴き声を上げながら、異常なほどの蝙蝠が飛んでくる

「うわあああああ！？」

チャールズはパニック状態！

モアは冷静にその蝙蝠を見る。中から出ているのは

（人の腕？）

その腕はまっすぐにモアへと伸び・

「きゃああ！」

モアを押し倒した

チャールズは荒い息を整えながら

「大丈夫か！？モア？」

と叫ぶ。しかし返事はない。

「モア？モア！」

静かな館に、チャールズの叫ぶ声が響いた

二階では、腕につかまれたモアが椅子に押しつけられたところだった

「捕まえた」

少年は誰に言うでもなく呟く

「げほっげほっ」

モアはせき込んだ

「え！？人間！？」

少年の声は動揺をうつしている

少年の姿は、馬車の中の少年と同じ

「どうして、こんなところに？」

がしゃん

少年が呟くのと、モアが手錠をつけるのは一緒だった

「こいつ・・・よくも」

「しかも警官！？」

「何者だ！」

モアが叫ぶと、少年は困ったように手を振る

「すつすみません！つい夢中で気づかなくて・・・」

そう言うと、後ろからもう1人現れる

「捕まえようとしただけなんです！猫を！」

少女は自分の事のように叫ぶ

「ええ？」

月明かりが二人の姿をうつす

「「ただの旅人です」」

「へー此処ってそんな物騒な噂が、あつたんですか」

少年は手に手錠をかけられ、椅子に座らされていた

「さっき此処に着いたんです。その時こののら猫に大事な物を取られちゃって・・・」

そこまで言つと、少年の上に座っている少女が笑顔で

「ずっと、探し回っていたんです」

と続けた

「ふーん」

「ほつ本当なんです！師匠からの預かり物で無くすわけにはいかないんです！」

少年は必死に言うが、モアが顔をしかめただけだった

「師匠？その人はどこにいるの？」

モアの質問に二人の表情は暗くなる

「いや、それが・・・インドで疾走して・・・」

そこまで言つと少年は涙を浮かべる

とんつ、と椅子の淵にのつた猫に

「お前のせいだぞ！」

などと嘆いている

「アレン・泣いちゃだめだよ」

少女はアレンと呼ばれた少年の涙をなめる

「っ！ビックリした・・急になめないでよ！ラルトはこの状況どうすればいいか

分かるんですか！？」

ラルトと呼ばれた少女はうーんと、考えるそぶりを見せると

「分かりません！」

少し泣きながら笑顔で言った

「とにかく、同僚を連れてくるから待ってなさい」

モアが言った時だった

「にゃー」

猫が鳴いた。鳴いただけならよかった。その後聞こえたのは

「うわあああああああ！？」

明らかに襲われている悲鳴が聞こえてきた。

そして、その後の凄惨な音が聞こえ、地面が揺れる

「！貴方達はここで待ってなさい！あと少年！その子を守りなさいよ！！」

モアは慌ただしく部屋を出て行った

階段を下りながら

「誰だ！！」

と叫ぶ。

返事はなく、後ろから光で照らされるだけ。それで見たのは・

「うああああああ・・・」

なにかで柱に打ちつけられ、もだえ苦しんでいるチャールズの姿だった

「ちゃっチャールズ・・・？」

チャールズの顔色は黒くなり、声が途絶えたと思ったら

どがん！

煙と共にチャールズの体は爆発した

服だけが残る。噂と同じ光景

「そっそんな・・・まさか、噂は本当に・・・」

服だけになった所に歩み寄っていくモア

しかし、首を持ちながら苦しみだす

「何？くるし・・・」

すると後ろからアレンが自分のバンダナでモアの口を塞ぐ

そして、階段まで運ぶ

「気を付けて、このガスは有毒です」

説明するとアレンは悲しそうな顔をする

「彼はAKUMAに殺されたんだ」

モアは不思議に思い

「あっアクマ？」

アレンに訊く

そこでモアは意識を闇におとした

「「おっおまわりさん！？」」

アレンとラルトの心配そうな声が聞こえた

「んっ・・・」

モアが目を覚ますと、そこは見慣れた場所

体をおこすと隣にいる人に腕を持ち上げられる

「あれっ・・・ここは？」

モアは此処が何処だか今だにわかっていない

「署だ」

短く言われると、ようやく理解する

男は扉に向かって駆け寄ると、叩きながら

「警部！モア巡査が気がつきましたぞ！」

と叫ぶ

引つ張られたモアは目を擦りながら、ぼくっとしていた

「入れ！」

中から声がすると男は素早く扉を開ける

眼鏡をかけると、モアは冷静さを取り戻す

「そうだ！チャールズが」

「分かっている」

隣の男が答えると

「今、容疑者を取り調べているところだ」

警部も答えた

「えっ？」

モアが容疑者の姿を見ると

「・・・・・・・・」

無言で困っているアレンと

「・・・・・・・・」

無言で怒っているラルトの姿があった

「名前はアレン・ウォーカーとラルト・ウォーカー。後者は事件に
関係性は無いと見える。

「こんなか弱い少女にあんな事は出来ないだろう。」

警部が言つと、アレンは苦笑いしながら

「ああ・・・・・・・・」

モアに頭を少し下げた

すると、警部がどんつと机を叩く

「お前がやったんだろう!!」

と喚く

「ひiiiiiiiiiii!」

アレンは完全に怖がっているが

「違います!!アレンは何もやってません!むしろ助けたんです!」

ラルトは頬を膨らませながら、怒っていた

「お嬢さん。どうみても怪しいじゃないですか」

「だったら私も怪しいはずですよ!とにかくアレンは何もやってません!」

ラルトは零れる涙を拭う様子もなく、アレンに抱きつく

「・・・」

その様子に警部は黙る

「ほら、困ってるじゃないですか。ラルト、嬉しいですけど、今はしずかにしときましょう」

アレンはそうラルトに言うと、優しく抱きしめ返した

「分かりました」

ラルトは素直に言うと、アレンの膝の上に座る

そこを見計らって

「だから、お前がやったんだろう！」

警部はもう一度怒鳴った

「ですから、僕はやってません！もちろんラルトも！」

僕達はただ、気絶したお巡りさんを此処へ運んできただけなのに、

どうしてそうなるんですか？」

「そうですよ！」

アレンも丁寧な口調だが怒鳴り、ラルトも賛同した

「お前達！つてお嬢さんはいたけど別だからね？現場にいただろう
！！」

「ラルトを疑わない事は嬉しいですけど、無茶苦茶じゃないですか
！！」

「うるさい！とにかく怪しい！！それにこの手！」

警部はアレンの左腕を持ち上げる

「真っ赤じゃねーか！」

それにアレンは困ったような顔をしながら

「いやっ・・・これはもともと・・・!」

と言って腕を振りほどいたのだが、その弾みで手を甲覆っていた物がとれた

そこにはエメラルドグリーンに光る十字架の何か・・・が埋まっていた

「・・・!」

「なんだこりゃ・・・」

モアは驚きに声がつまり、警部は声を上げて驚いた

「アレンだけじゃありません! 私もあるんです!」

ラルトはアレンに疑いが全て行かないように、自分の右腕を見せる

ラルトの右腕の甲にも、同じ何かが埋め込んであった

「お前、何埋め込んでるんだ・・・?」

警部がそう聞くと、二人の手の十字架が綺麗に少し光る

何も答えない二人に諦めたのか、警部は二人の顔を指差し

「まったく、とんだイカレ野郎だ! お嬢さんは・・・まあ、聞かないことにしよう」

どこまでも、可愛いラルトに甘かった警部でありました

「あっあの・・・」

「ん？」

モアが横から口を挟んでくれた

二人の座っている椅子まで歩き、

泣いているアレンと、泣きながら頬を膨らまして怒っているラルトの後ろに立つと

「このこ達は、事件が起こるまで自分と一緒にでした」

そう言った

「ぬわぁにい？」

警部が困っていると、追い討ちをかけるように報告係が

「警部、現場にはかなり大型の銃器とみられる弾痕が残っております

しかしながら、この少年とお嬢さんの所持品といえば、猫一匹と小さなトランクのみ。

今だ現場から、それらしき銃器は見つかってありません」

警部は少し黙ると、また机を叩きながらモアに

「何故気絶などしたあ！！モア・フェッセ巡查！！」

と怒鳴った

「もっ申し訳ありません」

モアは謝った

警部は頭の後ろで腕を組みながら

「現場にしながら犯人の姿も身とらんとは・・・」

ちよつとした嫌味を言った

「あの・・・」

アレンとラルトが二人で同時に手を上げながら言い始める

「僕／私、犯人しってます」

「ええっ？」

二人の言葉にモアと警部は驚きの声を上げる

「姿は見てませんが、どんなのかは知っています。捜査に参加させて下さい。」

犯人の名称はAKUMA。僕／私、立場上よく出会っんです

まだまだ人を殺します。早く止めないと、手に負えなくなりま
すよ?」「」

息継ぎのタイミングまでピッタリの二人。他の人が密かに感心して
た事を、二人は知らない

「アクマ？」

モアが聞き返すと、二人は同時に手の甲を見せる

「これは対AKUMA武器です。エクソシストって、ご存知ですか？」

僕／私は、AKUMA退治専門のクラージマンなんです。」

ひと時の静寂・・・何故か空気が重い

「エクソシスト？なんだそりゃ？」

呆れたようにため息をついた警部は、椅子から立ち上がった

「もういいよお前。お嬢さんは、参加したいならしていいけど。

とりあえず釈放。俺は現場に戻る、お嬢さん来るかい？」

その言葉にラルトは

「いえ、私アレンと一緒にやなきゃ泣いちゃうタイプなんで」

といって断った。その言葉に驚きながらも、嬉しそうに笑って少し
強くラルトを抱きしめるアレン

「そうか……。モア巡査!! 自宅でこいつとお嬢さんの見張りだあ
」

((ええー！！?))

モアとアレンの心の中の叫びは、綺麗に重なった

「最後までお嬢さんって言うてくださって、ありがとうございます」

「いえいえ。綺麗なお嬢さんには、お前なんて言えません」

ラルトは少しずれていたが・

「ただいま兄さん。兄さん？」

モアは帰宅し、家にいる自分の兄を呼ぶ

「兄さん？」

扉を開けると、そこには自分の兄。

「お帰りモア。今日は帰るの早いね」

そう言われると、モアは顔を顰めた

「兄さん、最近全然食べてないでしょ。ダメだよ、ちゃんと食べなきゃ」

モアはゆっくりと、手をつけていない料理に近づく

「お腹いっぱいなんだ。ごめんよ」

モアの兄は、そう言って謝った

「でも・・・すぐに減る」

その言葉にモアは兄の前に座る

「頑張ってマルク兄さん。天国で姉さんも、そう願ってるわ。」

モアが言ったときだった

「コラッ！暴れるな！」

「にゃお〜ん」

と言う声と、何かの落ちる音が廊下から聞こえた

「何やってるのよ」

モアが扉を開けると、アレンの上にラルトが寄りかかっ

アレンが猫を持っているところだった

「現場へ行く気だったわね？」

モアの鋭い質問にアレンは苦笑いしながら

「ちょっとだけ・・・」

つと答えた

モアは、幸せそうに瞳を閉じて笑っているラルトを見つけると

「ラルトちゃん。どうしたの？」

と訊いた

「少し疲れて、眠っちゃったみたいです」

と答えた。「でも、起こしたらすぐに起きますよ」つとも付け加えた

「っと、話しそれちゃったけど、ダメ!！」

日は暮れ、外は漆黒の闇に染まる

黒い色紙に赤い絵の具を雑に塗ったような色を空をしている

もうすぐこの景色も、一面真っ黒になるのだろう

アレンはゆっくりと窓へ歩み寄り、外を見る

アレンの肩には猫が乗っていて、ラルトはアレンと腕を組んで一緒に外を見ている

「・・・・・・」

ラルトは無心でただ、瞳をキラキラさせながら景色を見ている

（はぁ、目の前なのに・・・警部さん大丈夫かな？）

ラルトとは逆にアレンは心配をしていた

「？アレン」

ラルトが何かに気づきアレンに声を掛ける

「どうしましたか？ラルト」

「心配しなくても大丈夫だよ。少なくとも私達がこの距離にいるんだし」

もしAKUMAがいたとしても、派手に暴れてくれるからすぐに行けるよ」

ラルトはにっこりと笑う

アレンは心を見透かされている事に驚く様子もなく、ただ

「そうですね」

と言って、ラルトの頭を優しく撫でるだけ

「そうですか？ならいいです。アレンが笑っていてくれるならそれ

だけで」

ラルトは先ほどよりも優しく、柔らかく微笑むと少し強く腕を抱いた

「アレン君とラルトちゃん、まるで恋人同士ね」

後ろで見ていたモアはそう言った

「えっ？あの、私はアレンの事大好きですもし兄妹じゃなかったら、恋人になりたいと

思いますけど今はただ、兄妹のコミュニケーションといえますか・
・・／／／／」

ラルトは頬を真っ赤にさせながら言う

「・・・別に僕は、兄妹でもラルトを恋人にしたいと思います」

「ふえ？」

アレンの言葉にラルトの頬は更に赤くなる

「すみませんでした。実をいうと私もアレンと兄妹でも恋人になりたいと思っちゃいました！」

最後の言葉でラルトは、真っ赤な顔をアレンの胸に埋める

「仲いいのねえ。私初めて見たわ、こんな仲のいい兄妹」

モアは微笑んで言った

「からかわないください、モアさん……。私この手の話苦手なんです……。」

ラルトはアレンの胸に顔を埋めたまま話す

「確かにラルトはすぐに真っ赤になりますね。そこも可愛いですけど（笑）」

何気なく言うアレンだが、言った後にあっ、という表情を見せる

「アレンなんて……。大ッ！……。好き」

ラルトは赤面しながらも言い切った

これには、さすがにアレンも少し頬を桜色に染める

「えっと……。僕も大好きです」

「にゃおくん」

アレンが下で見上げるラルトの顔を覗き込みながら言った

肩の猫がラルトの鼻先を舐める

「話をそらして悪いんだけど、アレン君とラルトちゃんは本当にAKUMAが犯人だと思ってるの？」

その言葉に二人が反応して振り向く

「「ええ？はい？」」

さっきまで照れていたラルトは落ち着いているが、まだ頬はうつすらと赤い

モアは本のページをめくりながら話していく

「アクマと言うのは、昔の人が病気や災いに対する恐怖心から作り出した空想のキャラクターよ。」

私は呪いやアクマなんて信じないわ。そついうの嫌いなの」

強い口調でいいながら、二人を真っ直ぐと見据える

「「えつと、僕／私の言ってるアクマはそついうものじゃないんです」」

二人の声は又重なる。二人にとって当たり前らしいので今度から触れないようにしよう

「えつ？」

モアは疑問の声を上げる

二人は人差し指を立てて話す

「「AKUMAとは、兵器の名称です。人類を標的に作られた悪性兵器。それがAKUMAです」」

そこまで言うと、ラルトは人差し指を口に当てて

「だから、チャールズさんはおそわれたんだよ」

と言う

その声は悲しみに暮れていた。何故人の事なのにそこまで悲しむのかモアには分からない

「普段は人の形をしているので、人間特別しにくいのですが・・・」

そこまで言っただきだった

どがんっ

という音をたて、荒く扉が開けられた

そこにいたのは、モアの兄であるマルク

「おおおおおおおおおお」

不思議な声を上げながら顔を不気味に動かす

「マルク兄さん？どうしたの？」

モアが心配そうに駆け寄る

「・・・・・・・・」

二人は真剣にマルクを見つめる

「「!!」」

二人の目は・・・アレンは左目ラルトは右目に赤と黒の模様が現れる
マルクの後ろにいるのは・・・ドレスを着た女性

「うわあああ・・・うわおおおおお!!!!!!」

その時、マルクは大きな雄たけびを上げながら大きな化け物へと進
化していく

モアはただ呆然と化け物になってしまった”それ”を見上げていた

「なによ・・・これ・・・」

モアがやっと発した声だった。モアが言った後、アクマはがしゃっ
という音をたて

モアに沢山の銃を向ける

そして・・・

ずががががががががががが

紫色のレーザーのような弾は、部屋中に撃ち放たれた

がしゃん!ばごん!どん!

など、物凄い音を立てながら家は大破していく

アレンはモアに飛んできた弾を手を持ち、モアを抱え外に放り出される

そして、凄いスピードで隣の教会へと突っ込んでいった

「だっ大丈夫ですか・・モアさん」

アレンは少し苦しそうに問いかける

「ここ・・何処？」

モアへも多少のダメージはあった様子だ

「向かいの・・教会です・・」

モアはその言葉でアレンの左手を見る。そこにはあの大きな弾丸

「嘘っ！？あなたあの弾丸を受け止めたの！？」

その弾丸にモアが触れようとしたとき、アレンは弾丸を持ち上げた

「触らないで。AKUMAの弾丸です。この弾丸には毒のウイルスが含まれています」

AKUMAは自らの姿を銃器にカンバウトしてこの弾丸を撃ちだすんです」

そこまで言うと、アレンは抱えていた猫を見やる

猫には黒いペンタクルが幾つも浮かび上がってくる

「弾丸を撃ち込まれると・・・」

今度は、いつの間にかモアの後ろにいたラルトが話し出す

「急速にウィルスが侵食して・・・」

ラルトが悲しそうにいうと、猫は爆発した

「っ!!」

モアは驚いて、顔が引きつっている

「「助けられなくてごめんよ／なさい」」

二人は先ほどまで猫のいた場所を見つめ、謝る

「マルク兄さんは・・・どうしちゃったの?」

モアが一番気になっていた事を訊いた

「モアさん、AKUMAは人間の死体を被って社会に進入するんです。」

「「あれはマルクさんじゃありません。マルクさんを殺し、成りすましていたAKUMAです」」

猫の灰に二人は、着ていたコートを被せる

「そんな・・・兄さんがアクマ・・・？」

「来た」

アレンはモアの体をひっぱり、壁の窪みに隠れる

少し待つと、派手に壁をぶっ壊しAKUMAが入ってきた

「こーら！お前ら何やつとる！！」

そんな緊迫した中に、KY警部が入ってきた。緊張を感じるボケが

「えっ？」

アレンとモアは声のした方を振り向く

「おわ！？なんじゃこりゃ！？」

警部はKYで入ってきたくせに、うるさく喚く。社会の「ミ」が

「うっうてー！！！」

警部の声に、何人かの警官が銃を撃つ

その光景にラルトが叫ぶ

「銃じゃダメです！逃げて下さい！！」

ここで逃げてほしかったのだが、叫んだのがラルトだ。

しかも、コートを脱いでミニスカート状態だ。警官全員が見とれて動けなかった

その間に、AKUMAは銃を警官共に向ける

そして、撃った

「やめて・・・」

モアのかきけしを

「人に銃なんて撃っちゃ、いけません！」

ラルトは友達をしかる様に叫ぶと、警官達の前に立つ

「！ラルトちゃん！アレン君、ラルトちゃんが！」

「大丈夫です。ラルトも対AKUMA武器をもっています」

冷静に答えるアレンだが、その表情をみるかぎり心配は隠せていない

「スノウ・メロディ！！」

ラルトが大きく、形の変化した右腕で空気を横なぎにすると

空間が裂け、そこから悲しい曲が流れ出す

その曲を浴びた弾は、一瞬で氷地に落ちる

・・・が、しかし

追加で銃を撃ってきた

「あっ！ずるいですよ！」

ラルトはいきなりの事に驚いて、次の行動に移動できない

「くっ！」

ラルトは煙の中に消えた

カラン

転がったのは、さっきまで警官が被っていた帽子

「警部・・・皆・・・」

服だけになってしまった警官達。

「そつだ！ラルトちゃんは！！」

煙の中目を凝らすと、人影が一つ見えた

「大丈夫です・・・ちよつと当たっただけですから・・・」

中から声も聞こえた

モアはそれにほつとするも、涙は零れた

「この化け物！！なんで殺すのよ！？何で！！」

「言つても無駄です。モアさん、望んでやつてる訳じゃない。兵器として進化するよう

プログラムされてるんです」「

煙の中から出てきたラルトとアレンの声が重なる

「大丈夫ですか？ラルト」

「あはは・・・油断してた。大丈夫。あんな雑魚にやられませんよ。

まだ一割もだしてないですから」

ラルトは笑顔で言った

モアはAKUMAを指さしながら叫ぶ

「あれはただの、殺人マシンよ！！」

「それは違う／＼います。AKUMAは魂を内蔵した”生きる兵器

” なんです。

その魂は製造者に支配され、罪に苦勞し己の姿に絶望し、現実を憎悪する。

そんな魂のフラストレーションがAKUMAを進化させる、エネルギー元になるんです。」

そう言った二人の目は、又赤と黒の不思議な模様を映す

「あのAKUMAにも、誰かの魂が入れられています。

彼女はきっと、マルクさんととても絆の深かった人。」

そう言うと、何か心当たりがあるのかモアは少し神妙な顔つきをする

「AKUMAは、機械と魂と悲劇を材料に作られます。

人は誰しも、心に闇がある。悲劇によつてその闇が深くなった者の処に

製造者が現れ、AKUMAをつむ。」

「悲劇・・・」

何かを思い出すように呟いた

一人の女性。とても華やかに着飾った女性がいた。

その姿を見る限り・・結婚式だろう

女性のとなりにはマルクがいる

その女性が一人の少女の方を向くと、その少女・・モアは顔をそらす

「まだ、モアとケンカしてるのかい？」

マルクが訊くと、女性は悲しそうな顔をする

「だって・・警官になるなんて反対だもの・・。父さんと母さんを殺した犯人を捕まえたいだなんて」

「クレア、モアは何も復習のために警官になるんじゃない。

僕らがずっと幸せ暮らせるよう、守りたいんだそうだ」

マルクが言うと、クレアはため息をつく

「大丈夫。信じようモアの気持ちを、そして神のご加護を。

神は信じる者を裏切りはしないよ。」

マルクが笑いかけると、クレアは少し涙を溜めながら笑う

「そうね、信じるわ」

そうだった時だった

上から大きな、思いシャンドリアが降ってきたのだ

「ああ!?!」

クレアはマルクを庇う様に押しのけた

「姉さん……」

モアが驚いて呼ぶが返事はない

「クレア……クレア……!!!!!!」

教会には、マルクの悲痛な叫び声が響き渡った

泣いているマルクの前に現れたのは、変な格好をした一人の誰か

「はい、こんばんはv」

とても楽しそうな口調でその誰かはマルクに話しかける

そして、後ろにある黒い骨のパーツのようなものを見せた

「これは、我輩が作った魔道式ボディ。魂をとりこみ復活させます。

神からクレアを奪い返すのです」

「へっ？」

泣きながら、驚きながらも最後の希望に胸を膨らませマルクが顔を上げた

「これには貴方の協力がいるんですがねv

クレアと絆のある貴方の呼び声が」

「クレアの魂を、呼び戻すことが出来る・・・？」

「そうv」

その誰かは、それだけいうと、霧のように姿を消す

マルクは嬉しそくに骨のパーツの処へと歩み寄る

そして

「クレアーーー!!」

クレアの名を呼んだ

その瞬間に、骨のパーツに上から何かが降ってくる。そして、頭の部分に位置するところに

『クレア』と名前が書かれた

「マツマルク・・・」

骨のパーツは喋った。間違いなくクレアの声だ

「クレア・・・」

「何て事なの!?!?どうして私をAKUMAにしたの!?!」

クレアはマルクに怒鳴った

「もう逃げられない!!」

クレアの言葉をイマイチ分かってないマルクは、後ろからその誰かに肩をつかまれる

「もうお前は、我輩のものです。命令です、この男を殺して被りなさい」

その誰かがいうと、クレアは枠からはずれ動き出す

「いやややあああああ！」

「うわあああああああ！」

クレアはマルクを殴り、マルクは殴られて殺された

ぐしゃぐしゃ、ばきばき、がきがき、ばきばき

いやな音をさせながら、クレアはマルクの死体を被る・・・いな体の中に入る

その誰かは心底嬉しそうに言う

「ハッピーバースデー、出来上がりv」

アレンの悲しそうな顔。ラルトは瞳に涙を浮かべている

「そんあ・・・これが、これがあのクレア姉さんの！？」

モアは泣きながら叫ぶ。AKUMAはゆっくりとモア達の方を向く

モアは崩れた

アレンとラルトはAKUMAへと歩み寄る

そして、アレンは左腕ラルトは右腕を上げる

二人の手を覆っていたものは一瞬にして取れる

「「僕ノ私に宿る聖なるクロスよ、今闇を破壊する力を！」」

エメラルドグリーンの光が、双方の腕を包みそして腕は・

じゃきん

大きな鉤爪のような、とても大きなもなへと変化した

色は銀色で、手のような形をしている。掌の甲には光を放つクロス

「「哀れなAKUMAに、魂の救済を！」」

アレンは左目が赤く光り左腕が変化する。ラルトはその逆右目右腕

二人が並ぶと、まるで大きな魔獣がいるように見える

AKUMAは二人に向かって銃口を向ける

その瞬間に二人は同時に跳び、悪魔を大きな腕で横なぎにする

「「ごめんよ／なさい・・今、楽にしてやるから／あげるから」」

アレンとラルトの声は、今にも泣きそうだ

「「どうか安らかに・・ミセスクレア」」

そう言ってラルトがAKUMAにキスを落とす

モアの涙が地面に落ち、波紋を作ったときAKUMAは悲痛な雄たけびを上げる

AKUMAに鎖で繋がれていたクレアは解放たれ笑顔を見せる

「ありがとう・・・」

その声をのこして、クレアは消える

アレンとラルトの顔はとても、優しかった

教会の壊れた窓から、綺麗な三日月が見える

「天国で結ばれてるよね・・・クレア姉さんとマルク兄さん」

「そうですね・・・」

「絶対」

アレンが答えて、ラルトも言った

モアは泣いている顔をうつ伏せている

隣には壁によりかかりすわっているアレンと、アレンの上の座っているラルト

ラルトは今にも寝そうな顔だ

「千年伯爵、それが製造者の名前です。彼は今、人類滅亡のシナリオを演じている

それを終わらせるのが、エクソシストの役目です」

アレンが言う時には、ラルトは静かな寝息を立てて眠りについていた
その時、アレンとラルトのコートの下から、ティムが出てきた

アレンはラルトを横抱きにして立ち上がる

ティムは、ラルトの頭の上に乗る

「行くよ、ティムキャンピー。」

そう言うと、アレンはモアの方を向いて一礼する

モアは少し微笑んだ

「そう言えば、ラルトちゃんに言いたいことがあるんだけど・・・」

モアがそう言うと、アレンは「分かりました」といってラルトの頭を撫でる

「起きて。大事な話があるって」

そう言うと、ラルトは瞼をゆつくりと持ち上げる

「はい・・・なんでしょうか・・・」

モアに顔を向けるとモアはラルトに

「クレア姉さんにキスしたんだから、アレン君にもしてあげてね」

そう優しく言った

ラルトは素直に「はい」と頷くと、アレンの頬にキスをした

「ええっ？」

アレンは頬を赤くする。ラルトは幸せそうに微笑むと瞼を閉じ夢の世界へ旅立つ

「これから、アレン君からもしてあげてね」

モアはそう言った

アレンは照れながらも「分かりました」といって、ラルトの額にキスを落とした

黒の教団 完

崖

雲が所々に見えるほど高い処に、アレンとラルトがいた

「なんで、こんなとこにあんなもんだてたんだ・・・？」

「しょうがないよ。だってエクソシストの本部なんだもん」

「ラルトは元気ですね・・・」

「えっ？だって楽しいじゃないですか♪崖登るなんていつぶりでしょう」

ラルトは元気よく、もう下が見えないような崖の側面を登っていく
数分後、ラルトはもう上についていた

「早く～アレン。私最後は引き上げますから」

上でにこにこしながら待っているラルトは、こんな時でも見惚れてしまう

数十分後・・・

「いくよ」

「はっはい・・・」

「ほいさっ！」

やっとアレンがラルトの手の届く高さまで登った。ラルトは待ってましたと言つように引き上げる

「ありがとうございました・・・」

「いえいえ」

アレンは思いっきり引き上げられた為、ラルトの上に覆いかぶさっていた

ラルトは相変わらず微笑んでいたが

ラルトの上から下りると、一息つきながら座る

「「やつとついた／きました・・・。エクソシスト総本部黒の教団。・かな？」」

少し疑いながらも、二人は目の前にある真っ黒に建物を見渡す

「「話には聞いてたけど／ましたけど・・・なんていうか・・・」

雰囲気あるなあ／りますねえ。」」

アレンが立ち上がって、ラルトに手を差し出す

「ありがとう」

ラルトは素直に手を取ると、アレンは自分の方に引く
それでラルトはすっぽりと、アレンの胸の中に入る

「どうしました？」

「別に。ラルトを抱きしめたかっただけです」

アレンはさらっと言い、ラルトは少し頬を赤く染める

「「ここだよね／ですよね？ティムキャンピー」」

二人が聞くが、ティムは何も反応しない

「とにかく行ってみるか・・・」

「そうですね。行ってみましょう」

アレンとラルトは手を繋ぎながら歩いていく

その後ろを、監視ようのゴーレムが映す

処変わって黒の教団

「・・・・・・・・」

一人の少女が監視ゴーレムの映像を無言で見つめる

「何者だあいつ・・・と譲さん」

ソファに座っている男が誰かに聞く

「あの崖を・・・登りきった？」

その疑問に答えることなく、後ろにいた男が疑問を増やす

「こつちに、来るぞ？」

また誰かが疑問を増やした

すると、マグカップを持った男がやって来る

「なんだいこの子・・・と、この世紀の美少女は」

・・・最後の言葉には触れないでおこう

「ダメだよ、部外者入れちゃ、何で崖から落とさなかったの？」

その言葉にソファに座っている男が答える

「ああ、コムイ室長。それが、微妙に部外者っぽくねえ、すんよね。

それに・・・こんな可愛い子落としていいですか？」

こいつの最後の言葉にも、触れないでおこう

「ここ見て兄さん。」

モニターの前で見ていた少女が話す

「この子達、クロス元帥のゴーレムをつれてるのよ。」

「ほんとじゃ」

となりの凄い・・・なんていうか、変な人もうなづいた

「すいませーん」

アレンが扉に向かって叫ぶ

すると、ソファに座っている男が耳にイヤホンのようなものをつけた

「クロス・マリアン元帥の紹介できた、ラルト・ウォーカーとアレン・ウォーカーです」

綺麗な、可愛いソプラノ声が響く

「「教団の幹部の人に、お目にかかりたいのですが・・・」」

声を重ねて言ってくる

眼鏡をかけた男が

「クロス元帥の知り合いだ・・・」

と、呟いた

そのとなりの男が

「あのひと・・・生きてたのか？」

驚きの声を漏らした

「紹介って言ってますけど、室長なにか知ってます？」

ソファの兄貴がコムイに訊くと

コーヒーをすすった後

「・・・知らない」

きっぱりと言った

ソファの兄貴をその言葉でアレンとラルトに

「門番の身体検査受けてー」

っと、実にのんびりした口調で言った

「えっ？」

二人は辺りを見回す

ふと扉に目をやると、そこには人の顔をしたものが・

「」どっどっも・・・」

アレンは引き気味に笑って、ラルトは楽しそうに微笑んだ

その瞬間にその顔が飛び出した

「「ひっ!」」

アレンは固まり、ラルトはアレンに抱きついた

「レントゲン検査、AKUMAが人間か判別」

そう言うと、門番であろうヤツの目が光り、二人を照らす

「うつらない? バカな!」

門番が何故だか焦り始める。その時、二人の目の周辺に描かれた模様を見つけ出すと

目に×印を出す

「ぶっぶっぶっ!!!」

「「「「「ええええええええええ!?!」」」」」

門番の判断び、一同吃驚

「こいつらアウトオオオオオオオ!」

叫んだ

「えっ？」

「どういう意味・・・?」

アレンは驚き、ラルトはあまりの声の大きさに涙を浮かべていた。

門番は目から大量の涙を出しながら泣き叫ぶ

「こいつらAKUMAだAKUMA!!呪われてる!!ペンタクルはAKUMAの印!

千年伯爵の仲間！

「なっ！」

二人は驚きと、門番の凄さに固まっていた

「ええええええええ！？」

また、中の人たちは驚きの声を上げる

「スパイ進入！スパイ進入！」

ソファの兄貴は、変な人に

「場内のエクソシストは？」

と訊く

変な人は

「大丈夫じゃ」

と、答えた

「神田がもう、ついたわ」

隣の少女も言った

アレン達の元へやってきたのは、長髪の男

二人が見上げると、男は

「二匹でくるとは、いい度胸じゃねえか」

と、完全に誤解した言葉を発する

「ちよつちよつと待つて！何か誤解して・・・」

「アレン！今はそんな事より自分の身を守れ！あいつに何言っても無駄ですよ！」

それに、あいつのイノセンスは装備型。しかも剣です。

あの剣は・・・六幻^{むげん}という技を使います！」

ラルトの言葉に、中の人たちと長髪の男は驚く

「てめえ、何者だ？」

鞘に手を当てたまま発される声

「別に、あなたのイノセンスが教えてくださっただけです！」

ラルトが叫んだ瞬間だった

「六幻抜刀！！」

男は上から剣を振り下ろしながら下りてくる

「うっ」

「誤解ですって、言ってます！」

アレンはラルトを庇うようにたと、左腕のイノセンスを開放した

ラルトは誤解です！と叫びながら、右腕のイノセンスを解放する

彼は神田と呼ばれていた。

神田は二人のイノセンスに対し、遠慮なく剣をふるう

「うわっ！」

アレンが左腕で庇うと、そこには傷が・・

（対AKUMA武器に傷が？）

こんな時でも疑問を抱くアレンって・

「お前ら・・・その腕はなんだ」

「対AKUMA武器ですよ。僕達はエクソシストです」

神田の問いに答えたのはアレンだけだった。

ラルトは俯いて、何か言っている様子

「何？」

神田は機嫌悪そうに言う

「門番！」

門番に叱声を浴びせた

「いつでも確かにペンタクルが見えたんだからさあ！AKUMAだつたらどうすんの！？」

「いい加減にしてください・・・」

門番の言葉にラルトが言った言葉だった

「さつきから・・・私ならまだしもアレンも疑って・・・」

貴方達・・・もう我慢できません！哀れなる愚者共よ！等しく灰に帰るがいい！」

ラルトはそう叫ぶと右腕を思いっきり振った

前と同じように空間が裂け、そこから音色が聞こえてくる

「デス・メロディ」

小さな声でラルトが言った

神田は素早く上に跳ぶ。さっきもで神田がいた所に育っていた木々は綺麗に枯れていく

「コムイさん宛に招待状が届いてるはずなの！！確認してみてよ！

もし私達を殺すというのなら・・・私は貴方達を殺します」

大きな声で叫ぶと、すごいスピードで神田の元へ跳び剣を奪う

そして、右腕で神田の首をつかんだ

「招待状・・・だと？」

神田は苦しそうに声を出した

一方黒の教団内

「あのこ・・・やばくないすか！？あの神田さんを倒すなんて・・・」

「強いにも程がある！あの態度から行くと、あまり人間と戦った経験はない！」

「それなのに・・・ほんの数秒で・・・」

「あんなに可愛い顔してるのに・・・」

すっごく動揺してました

「ってちよつとまで。あの子コムイさん宛に招待状が・・・」

じー・・・

皆の視線がいつきにコムイに向けられる

「そこの君!」

「はっはい」

「僕の机調べて!」

「あっあれをですか?」

コムイが言つと、指名された男は困る

なんせ、コムイの机の上には大量の本やら資料やらが・・・蜘蛛の巣まで見える

「コムイ室長・・・」 「コムイ兄さん・・・」

ソファの兄貴と少女の呆れた声が重なる

「僕もー手伝うよ」

はぁ・・・

教団の人達は、ため息をついた

「ラルトー下りてきて下さい！」

アレンが言っと、ラルトは笑顔で下りてくる

「大丈夫でしたか？・・・って、すごいですね・・・」

アレンはラルトが神田を捕まえてることに少し驚く

「うわっ！？すみません！まだつかんだままでした！本当にすみません！」

ラルトはまだ神田をつかんでいた事に驚き、誤りながら神田を放した

けほっけほ、という乾いた咳の音が聞こえる

そして、ラルトに殴りかかっていた

「これかな？いや、こっちなかな？」

コムイと巻き込まれた可哀想な人は、招待状を探していた

「あつ、ありました！クロス元帥からの招待状です！」

コムイは先ほどまで持っていた紙をほおり投げ「呼んで！」と言う

「コムイへ、近々アレンというガキとラルトという美少女をそっちへ送る

よろしくな。あと、絶対ラルトには手をだすな、クロス」

ひと時に沈黙

「はい、そういう事！リーバー班長、神田くん止めて！あんな可愛い子に傷なんかつけたらダメだよ

よし、コーヒーおかわりしてこよーっと」

ソファの兄貴・・・否リーバーは叫ぶ

「たまには机、整理してくださいよ！

神田！攻撃やめろ！」

コムイはコーヒーを入れながら少女のところへ歩く

「リナリー」

リナリーと呼ばれた少女は振り返る

「何、兄さん」

「あとで準備手伝ってくれる？久々の入団者だ」

「かつかいもーん！！！」

「クロスがよこした子が・・鑑定しがいがありそうだ・・それにしても、

ラルトちゃんはりナリーと並ぶくらい人気になりそーだね」

コムイはこんなヤツだった

「入場を許可しまーす、アレン・ウォーカー君ラルト・ウォーカーちゃん」

コムイはどこまでも、暢気なやつだった

「どういうことだ？」

ラルトを殴りかけている神田は不機嫌そうに聞き返した

「ゴメンね早とちり」。その子達クロス元帥の弟子だった。

ティムキャンピーがついてるのが、なによりの証拠だよ」

それをきいてもラルトを殴る構えは崩さない

その時

がんっ

リナリーが神田の頭を叩いた

「もう。やめなさいって言ってるでしょ？」

その言葉にラルトは

「あの・・・ちよつとはなれてもらえますか？」

と言った

リナリーは？マークを浮かべながら神田の元をはなれると・

「ちよつと試させてくださいね？」

六幻抜刀！災厄招来界蟲『一幻』

誰もいない地平へ、神田のイノセンスを使った

ラルトが言つと、六幻とよばれる剣から幾つもの蟲が現れる

蟲は赤い瞳が沢山あり足がないなど、ある意味言つて怖い・

その蟲達は何も無い地面にぶつかり、地面を抉った

「なっ！てめえ、なんで俺のイノセンスを使える！？」

神田は驚きながらラルトに怒鳴ると、逆にラルトはにこにこしながら歩み寄ってきた

「いずれ分かるよ。イノセンス、ありがとうございました」

丁寧に一礼すると、神田の鞆の中に六幻を戻した

「いいご主人ですね。六幻」

嬉しそうに言うと、ラルトの言葉に応えるかのように六幻が震えた

周りの皆は固まっていた。アレン以外は

「ラルト。入りましょ？」

アレンはラルトに歩み寄ると頭を撫でながら言った

「分かりました」

ラルトは柔らかに微笑んで応えた

「・・・早く入りましょ？神田」

「・・・」

リナリーが言つて、神田は無言で歩いて門をくぐった

全員がくぐると、すぐさま門が閉まる。

「私は室長助手のリナリー。よろしくね」

「はい！よろしくおねがいします」

ラルトが弾ける様な笑顔で言うと、リナリーは少し頬を赤くする

（何この子？私ですらすごく可愛くてドキドキしちゃっただけど…？）

内心ラルトに惚れ惚れしていたのは内緒である

神田はすぐに他の場所へ行こうとする

「あつ神田！」 「ユウ」

神田はラルトの言葉に、以上に反応しぱつと振り返る

「おい、ラルト。てめえ、なんで名前しつてやがる？」

「あら神田。名前で呼ぶなんて、珍しいじゃない」

神田の言葉にリナリーが口をはさんだ

「俺は一応ちゃんとした信念を持っているつもりだ。俺より強いやつにはそれなりの敬意を示す」

「くすつ ありがとうございます」

「・・・その前に、なんで俺の名前を知ってる？」

もう一度訊くと、ラルトはまだくすくすと笑いながら話す

「少し前に、神田ユナという子に会ったんです。その時に教えてもらった人かな？と思ひまして」

「！？ユナ・生きてたのかあいつ。」

ラルトが話すと神田は驚いたような顔をする

「まあいい。ラルトとの話はすんだ。お前はなんだ？」

不機嫌極まりない顔でアレンの方に顔を向ける

「・・・って名前でしたよね？」

怯えたような顔を見ると、鞆を地面に置く

そして、手をさしだした

「よろしく」

アレンがいうと、神田は目を細める

「呪われてるヤツなんかと、握手するかよ」

はき捨てるように言って歩き去ろうとした時、後ろから叩かれた

——ラルトに

「ユウは口が悪すぎです！このぱっつん野郎！握手しなさい！」

強引にアレンと神田の手を繋いだ。その後自分も手を繋ぐ

「人間第一印象が大事なんですよ？あのまま去ってたら私、神田の

事暗殺してます」

さらっと黒い事をいうと、笑って手を放した

「・・・可笑しなヤツ」

「「ひどっ！」」

アレンとラルトの声が重なった

「ゴメンね。任務から戻ったばかりで気が立ってるの。でもラルトちゃんってばすごいわ

あの神田を黙らせるなんて」

リナリーが笑って言うと、ラルトは笑みを深めた

静かな場内に三人の足音が響く

ラルトはアレンの腕を抱いて歩いている。アレンの表情はとても嬉しそう

そんな三人を遠くから警備人が見ていた

「あれが新入りか？」

「なんだ、ガキじゃねえか」

冷たい台詞だが、少し嬉しそうなのはどうしてだろうか？

「・・・あの美少女は誰だ？」

「さあな」

そんな会話が繰り返される

ふいにラルトの方を見ると、笑いかけてくれた

「あの笑顔は、殺人並みだな」

「同感」

二人の警備人の心臓は、ラルトの笑顔で貫かれた

そんな事を知る由もないラルトは、アレンの腕を抱いたまま少し震えていた

「大丈夫ですか？ラルト」

アレンが訊くと、ラルトは潤んだ瞳で見つめてくる

そして、無言のまま首を左右に振った

「じゃあ・・・」

そんなラルトの姿を見て、アレンはラルトを横抱きにした

「ありがと・・・う」

か細い声で、ラルトが言った

「ここが食堂よ。」

リナリーの案内に従い歩いていると、明るいところにた

ラルトはそれなりに安心したらしく、アレンからは下りている

「このフロアは修煉場。三高層になってるの」

ラルトは瞳をキラキラして見ている

「ここが談話室。」

ラルトの表情は一向に変わらない。まるで小さな子供だ

「他にも療養室や図書室、職員の宿舎もあるから後で案内するね」

リナリーは後ろの二人を確認しながら話す

「エクソシストは皆、ここから任務に出るの。だから本部の事をホームと言う人もいるわ」

「ホーム・家、ですか」

二人が声を重ねて言う為、リナリーは少し笑う

「まあ、出て行ったきり帰ってこない人もいるけど」

リナリーが言うと、アレンは固まりラルトは苦そうな顔をした

（（師匠です・・・））

心の中で思うことも一緒の二人だ

「そういえば、クロス元帥は？貴方達インドにいたんでしょ？」

「それが三ヶ月前・・・」

「アレンとラルトよお」

「はい師匠」 「？なんですか師匠」

「お前達が俺の助手になってもう三年。そろそろお前達も一人前になつてきた頃だ。」

「今日から正式にエクソシストを名乗る事を許す」

「本当ですか！？」 「・・・はい」

「だがその為には、俺と共に挨拶に行かなきゃならねえ。」

クロスは立ち上がり、ハンマーを持ってアレンに近づく

「お前、本部の場所しつてるよなあ？」

「はい？」

アレンは後ろへと下がる

「代わりに俺のゴーレムを置いていく。コムイという幹部に招待状を送つてやるから

目が覚めたら向かえ」

「まっまさか・・・ばつくれる気じゃ？師匠」

「俺・・・あそこ嫌いなんだよ！」

クロスはアレンにハンマーを振るった

アレンは気絶。瀕死状態・・・

「うえっ！？アレン！師匠・・・まさか私も・・・」

「大丈夫だ。ラルトにや怪我させねえ」

「えっ？」

「さっきラルトが寝てるあいだに数時間後に聞く睡眠薬を飲ませておいた」

「・・・犯罪・・・ですよ・・・」

ぐらりと視界が揺れ、ラルトは意識を闇に落とした

「弟子を殴って、睡眠薬を盛って逃げたの？」

「「はあ・・・」」

話が丁度終わったとき、1つのフロアの前に来ていた

「「このフロアは？」」

「じっは、兄の・・・」

それだけ言って、リナリーは歩いていった

「いや〜どうも。科学班室長の、コムイ・リーです!」

元気なコムイに連れられて、地下へと下りていく

「歓迎するよアレン君とラルトちゃん。いや〜さっきは大変だったね・・・って、

ラルトちゃん凄かったね〜皆驚いてたよ〜」

「どうも」

コムイの言葉にラルトは嬉しそうにお礼を言った

「じゃっ、腕を見せてくれるかな?」

白い部屋に連れてこられたアレンとラルトはコムイにそう言われた

「「えっ？」」

「神田君に襲われたとき、武器を損傷したでしょ？」

「あつ、それは大丈夫です」

アレンが即答すると、コムイは不思議そうに首を傾ける

「ラルトがいるので」

「どういう事かな？ラルトちゃん」

「ああ、はい」

急に話を振られながらも頷くラルト

「私、アレンだけなんですけど・・・傷を治せるんです」

「「えっ？」」

今度はリナリーとコムイが驚く番だった

「どうやるのか・・・見せてくれるかな？」

コムイが訊くと、ラルトは快く了解してくれた

「いくよ？アレン」

「はい」

ラルトが言うと、アレンは目をつぶる。するとラルトがアレンの唇に自分の唇を重ねた

二秒ほど経って二人は口離す。すると、瞬く間にアレンの傷は治った

「ほら。治りましたよ・・・って、どうしたんですか？リナリーさん」

リナリーは顔を真っ赤にしていた

「だって・・・普通目の前でキスしてる所なんて・・・見ないし。」

兄妹でしょ？」

顔を火照らせながらもリナリーはそう言った

「・・・？普通じゃないですか？」

二人が首を傾げながら言うもんだから、リナリーは俯いて何もいえなくなっていた

「いや～すごいね。ラルトちゃんとアレンくんは特別ななにかで繋がれているらしい」

コムイが言うと、アレンとラルトは嬉しそうに微笑んだ・・・がしかし

「でも、だからって逃がさないよ」

この言葉で二人の笑顔が硬直する

「まず、発動してもらえるかな？」

二人は無言で頷くと同時に発動した

コムイは二人の対AKUMA武器をじっくりと見てから

「これは、寄生型だね」

と言った

「寄生型？」

コムイの言葉には、アレンしか疑問を溢さなかった

「人体を武器とする適合者の事だよ」

ラルトは隣で答えた

「ヘーよく知ってるね。このタイプは数あるなかで、最も珍しいタイプなんだよ」

少し驚いたように二人が頷くと、コムイは嬉しそうな顔をする

「そんな適合者が二人も。しかも、二人が双子なんて異例だね」

「「そうなんですか」」

アレンとラルトは互いに顔を見合わせ、くすりと笑った

「ってことで」

コムイは一瞬で凄い姿になった

ヘルメットを被りドリルや、なんだか分からない物を持つ

「「えっ?」」

「少しの傷でもって事で・・・擦り傷だけでも治すよ?

ちよつとショッキングだから、トラウマになりたくなかつたら見ない方がいいよ?」

不気味に笑いながらラルトに近づくコムイ

引きつった笑顔で、泣きながら後ずさるラルト

「アレン・・・見ない方がいいって・・・」

「・・・・・・・・・・」

ラルトの目は、何もしないで事が過ぎるのを待ってと物語っていた

アレンは少し顔を顰めると、目を瞑った

「ああっ!!・・・・・・・・っ!!」

ラルトの一瞬の叫びは場内に響き渡った

「始まった・・・」

頭を抱えるリーバー

「かわいそうに・・・」

その後ろで男が同じく頭をかかえた

「ごめんね。兄さんの治療はちょっと荒っぽくて」

「・・・擦り傷なので・・・気にしないでよかったのに・・・」

隣から言つりナリーの瞳を潤ませたラルトが言った

「そういえば兄さん。今からあそこに行くのに、アレン君とラルトちゃん一応人間かどうか

確認しなくていいの？」

「いいのいいの」人間だから」

コムイが軽く答えたとリナリーが？マークを浮かべる

「どうして分かるの？」

問うと、コムイは急に真剣な顔になる

「この世界で呪いなんて受ける種族は人間だけだからだよ」

そう言いながらラルトの腕から手を放した

ラルトはすぐにアレनに飛びつく。そうとう怖かったらしい

アレンは少し笑いながら、ラルトを強く抱いた

アレンとラルトはコムイに連れられてリフトで更に地下に下りていた

「明日まで麻酔で動かないけど、ばっちり治ったからね」

コムイが言うが、返事はない

ラルトは先ほどからずーつとアレンに抱きついたままなのだ

時たま体がはねるのを見ると、今だに泣いているらしい

そんあラルトを愛おしそうにアレンが見ている

「まあ、そんなに泣かないで。本当に君達寄生型はレアなんだから」

コムイはリフトを止めながら話す

「数あるイノセンスの中で君達は選ばれたものなんだ」

「えっ？イノセンス・・・？」

アレンがコムイに訊いたと同時に闇の世界にリフトは止まり、上からライトで照らされる

上に見えるのは赤いカーテン。そのカーテンが五つある

「イノセンスとは・・・全知全能の力なり」

聞こえてきた声は、カーテンの前に立っている人達からのものらしい

「又、我らは神を手に入れた」

アレンが不思議そうに見上げていると

「彼らが僕らのボス、大元帥の方々だよ」

――と、説明してくれた

「さあ、君達の価値を彼らにお見せするんだ」

コムイの言葉に疑問を抱く二人。っと、思ったとき

後ろから白い何かのアレンを持ち上げた

ラルトは少し笑うと、地面にぺたんと座り込んだ

「うわぁ！？えっ！？」

持ち上げられたアレンの左腕に、白い何かが絡みつく。そして、腕の中に入っていく

アレンは驚きのあまりイノセンスを解放しようとする

「ダメだよアレン。その人は敵じゃない、イノセンスが泣いてるよ。」

ラルトがそう言ってきた。アレンはラルトの笑顔に安心して解放をやる

「イ・・イ・・イノセンス・・」

白い何かの本体は不気味に声を出す

「どうだいヘブラスカ。この神の使徒はお気に召すかな」

コムイが言うと、ヘブラスカと呼ばれた女性の様な何かは鼻の様な物をアレンの頭にくつつける

その瞬間光りが放たれ、アレンは少し目を瞑る

「2%・16%・30%・53%・83%・83%・どうやら83%が今お前と武器との

最高値らしい」

へプラスカが言うと、アレンが不思議そうに顔を上げる

「シンクロ率？」

「対AKUMA武器とお前との、生命線となるものだ。

シンクロ率が低い程発動が困難になり、適合者も危険となる」

すーっとアレンを地面へ座っているラルトの隣におろす

「おどろかせてすまなかった・ただ私は、お前のイノセンスに触れ知ろうとしただけだ」

次にラルトを持ち上げる。包帯のしてある右腕が痛痛しいがラルトは笑顔である

「2%・16%・30%・53%・83%・96%・
どうやら96%が

お前と武器との最高値らしい」

その結果にコムイはそうとう驚く

「96%・・・あと少しで元帥レベル・・・」

「しかし、それは一時的なものだ。アレンが傷つくと飛躍的にシンクロ率が上がる。」

普段のシンクロ率は・・・お前も83%だ」

そう言ってラルトをアレンの元に下ろす。ラルトは一度

「有難うございました」

と、お礼を述べるとすぐに又アレンに抱きついた

「アレン・ウォーカーよ、お前の武器はいつか黒い未来で偉大な時の破壊者を生むだろう

ラルト・ウォーカー、私も驚いているがお前はアレン・ウォーカーと同じだ。」

しかし、もう一つ分かる。お前はイノセンスの女神になりうる存在だ・・・」

「時の・・・破壊者・・・」

ぱちぱち

どこか場違いな拍手の音がする

「いやーすごいじゃないか！なんだかよく分からないけど、ヘブラ

スカの予言はよく当たるんだ

それにしても、ラルトちゃんも同じだとはね・・・君達は何から何まで同じだ」

そう言うのアレンが近づいてくるのが分かる

そして・・・

「いったあああああゝ！！」

ラルトが思いっきりコムイの足を踏んだ

激痛が体を走り、痺れる様な感覚が体中を駆け巡る

体の小さい少女に踏まれたというのに、まるで大きな龍に踏まれた様な感じだ

そのあとアレンが拳を見せながら怒りに満ちた声で

「一発殴っていいですか？」

と訊いた

コムイはやっとラルトからの痛みから立ち直りいつもの陽気な調子に戻る

「やだなあもう。入団者は、イノセンスを調べてもらうのが規則なんだよ」

「「そういう事は始めに言ってくださいよ!」「」

アレンとラルトは少し呆れたように怒鳴った

「だいたい、イノセンスってなんなんですか?」

アレンが訊くと隣のラルトはそうだと言う様に二、三回頷く

「ちゃんと説明するよ」

コムイが少し真面目に言うと、ラルトは腕に少し力を入れる

アレンはそんなラルトを少しだけ強く抱く

「この話を知ってるのは黒の教団しの関係者と、千年伯爵だけだ。

全ては約百年前1つのキューブが見つかった事から始まった」

コムイが言うとラルトは小さく呟く

「のちのもの達へ。我らは闇に打ち勝った、そして滅びていくものにある。」

行く末に起こるであろう災いから汝らを救う為、今ここにメッセー
ージを残す……」

アレンは驚いた様子なく真剣な眼差しでラルトを見つめ、コムイに
視線を移す

コムイは表情にこそ出していないが内心驚いていた

「キューブの中に入っていたのは古代文明の1つの予言と、ある物質の使用方法だった」

「ある・・・物質って・・・」

「イノセンスの事ですか？」

コムイはゆつくりと頷く

「そのある物質は神の力を佩びたものでね、そのキューブ自体もそうだったんだが僕達は

イノセンスと呼んでいる。君達の右手左手に埋め込まれた武器の事だよ。

対AKUMA武器というのはイノセンスを武器化したのなんだ」

ラルトの心臓の振動はアレンにも伝わるほどラルトはアレンに抱きついていた

「キューブの作り手は千年伯爵と戦った」

「伯爵！？」「千年公とですか・・・」

「千年伯爵を倒す事は出来た。だが一度、世界は滅んでしまった」

「それほど大きな戦いだっただのですね・・・」

消え入る様な声でラルトは言う

「旧約聖書に記されているノアの洪水がそれだ。キューブは暗黒の三日間と記しているけどね。」

しかしキューブの予言によると、世界は再び終末を迎えるらしい

千年伯爵によって」

「「えっ!?!」」

二人は驚きに声を上げる

「予言通り千年伯爵はこの世に再来した。そこで黒の教団が設立された」

「使徒を集めよ。すなわち適合者。適合者なくばイノセンスに発動なし・・・」

ラルトは真っ直ぐにコムイを見据える

「イノセンスの適合者。それがエクソシスト

だが、エクソシストに対抗する為に千年伯爵もAKUMAを作り出した

AKUMAはイノセンスが白ならば黒である暗黒物質、ダークマダーで作られている

伯爵もまたイノセンスを探し、破壊するべく動いている。

ノアの洪水によって飛散したイノセンスの数は109個。我々はまず各地に眠っている

イノセンスを回収し千年伯爵を倒せるだけの戦力を集めなければ
ならない」

いつになくコムイの顔を真剣になる

「伯爵より・・・先に」

「戦え、それがお前達の宿命なのだ」

上から大元帥の声が降ってくる

「いつしよに伯爵を倒す為に頑張りましょう。一銭にもなんないけどね」

コムイが明るく言ってくれた為二人の表情が柔らくなる

「「はい」」

差し出された手に二人の手が重なった

「ようこそ黒の教団へ。エクソシストは任務で世界各地にちらばっているけど」

その内会えるよ。ちなみに、ヘブラスカもエクソシストの一人だよ。」

「えっ?」 「・・・」

アレンが驚きへブラスカの方を向く。ラルトは笑みを浮かべている

「私はキューブの適合者として、創設時からここにいます。

アレン、ラルト・・・お前達に神のご加護があらん事を・・・」

「はぁ・・・」

静かな部屋にアレンのため息が聞こえる

ラルトは眠る寸前で、ベッドに寄りかかっているアレンの膝の上でうとうとしている

「そういえば、ティムキャンピーは何処へいったんだろう？」

周りを見渡した後ベッドに頭をのせ、上を見る

そこには悪魔のようなピエロがいる

「ん・・・」

ラルトがアレンの左手を握る。その表情は陰しく小刻みに震えている

「大丈夫だよ、ラルト。僕はここにいる」

優しく声を掛けると、眠っているにもかかわらずラルトは微笑んだ

『立ち止まるな。前へ進め。』

ふとアレンの頭に響く男の声

「やっとここまで来たよ・・・マナ」

誰に向かってでもなく声を発する

・ 「やっとスタート地点だ・・・誓うよ、何があっても立ち止まらない・

絶対にラルトは守ってみせる。失わない」

静かになるとふうと息を吐く

「ラルト、風邪ひくぞ」

アレンはラルトを抱きかかえるとベッドに寝かせる

「・・・アレン？」

眠たい瞼を持ち上げ、上から自分を覗き込んでいる人の名を呼ぶ

「何ですか？ラルト」

「離れちゃ・・・いやだ」

泣きそうな顔でラルトが言うと、対照的にアレンが微笑みながらラルトの隣に寝転ぶ

「離れるわけありませんよ。眠いんですよね・・・早く寝なさい」

「はい・・・。おやすみなさい」

安心した表情でアレンの頬にキスをすると、アレンの胸に頭を沈め
瞼を閉じる

「おやすみなさいラルト。怖かったんだよね・・・千年伯爵の話。頑
張ったね・・・」

アレンは愛おしそうにラルトを撫でると、ラルトの背中に腕を回し
瞼を閉じる

部屋は静かになり、二人の寝息が聞こえる・・・

E N D

マテールの亡霊

雲をつきぬけ、地上からは見えない程高いところに建っている黒の教団

黒い塊に朝日あたり、漆黒のシルエットを映す

教団の食堂からは元気な声が聞こえる

料理長であるジェリーの声だ

「Aセットおまち！Bセットおまち！Cセットおまち！」

ありえないスピードで注文された料理が並べられていく

「お次はなにかしら？」

この人、見た目男なのだが喋り方が女っぽいのだ

「あゝ・・・」

窓口からアレンと、可愛い水玉のパジャマを着たラルトが顔を出す

「・・・」

ラルトは瞼を擦りながらジェリーの方を向く

その姿はまさに天使といって良いだろう。瞳は潤んでいる

「あらゝ新入りさん？あらまた可愛い子達が入ったわねゝ」

ジェリーは顔を出して嬉しそうに言った

「初めまして！」

アレンが即座に頭を下げるとラルトがつられて頭を下げる

「アレン・ウォーカーといいます。・・ほらラルト、名前言って」

アレンが促すとラルトはまだ眠そうなふにやっとした顔で笑う

「ラルト・ウォーにやーでしゅ・・」

寝起きだからか声と喋り方までふにやっとしている

「まあ！礼儀正しい子達！すてきよゝ貴方達は兄弟かしら？」

「ああ、はい。僕の妹がラルトです」

「にやゝ」

ラルトはいまだにふにやっとしている

「ラルト、起きないと師匠が来るよ？」

アレンが言つと、ラルトの瞼が持ち上がる

「にゃ〜・・・じゃなくて・・・おはようございます」

目が完全に覚めたようで口調が元に戻る

「残念ね〜あのふにやっとした感じがグットなのに〜」

ジェリーが言うと、アレンがすこし強めな口調で

「あのままだと、他の男がラルトに近づきますから」

——と言った

「そうだ・・・アレン」

「？何でしょうk・・・」

ラルトは思い出したようにアレンの名を呼んだ

アレンがラルトの方を向くとラルトはアレンに軽くキスをする

「朝のちゅー忘れてた」

「・・・ありがと・・・／／／」

てへっと笑うラルトと顔を赤くするアレン

「あつあつね〜何作ろうかしら？」

ジェリーが注文を聞いてきた

「なんでも作っちゃうわ、あ・た・し！」

ジェリーが言うと、アレンはラルトの頭に手をのせる

「なんでも・・・ですか・・・」

ラルトは少し考える様な素振りをみせ、アレンの顔を見て笑った

「「それじゃあ・・・」

グラタンとポテトとドライカレーと、麻婆豆腐とビーフカレーとミートコロツケと

カルパッチョとマシゴレンと、チキンにツナサラダにスコーンと

クッパにトムヤムクンにライス。あと、デザートにマンゴープリンとみたらし団子を・・・

「二十本！」

最後まで綺麗に言い切った双子・・・ある意味恐るべし・・・

「あつあんだ達、そんなに食べるの？」

ジェリーがあまりの多さに驚いている時

「なんだところらー!!」

後ろから罵声が聞こえてくる

「もういっぺん言ってみやがれ!!」

又、食堂内に響く大きな声で罵声が聞こえる

声の主は大きなファインダーの男
クソシストのお手伝いさん
ファインダーとはエ

「おい、やめろバズ」

隣のファインダーが止める。そいつはバズというらしい

罵声を浴びせられているのは神田

(あの人は・・・あの時の・・・)

アレンの頭には、ラルトに殴りかかる神田の姿

(あいつか・・・ラルトに殴りかかりやがったやつは・・・)

一気にアレンの思考は変わった

「あの人は・・・ユウじゃないですか」

隣のラルトはにこにこ笑っている

「うるせーな」

ふいに神田の声

神田は落ち着いていて割り箸を湯のみに置くと、頬杖をつく

「飯食つてるときに後ろでめそめそ死んだやつの話なんかされちゃ、飯がまずくなるんだよ」

最後まで冷たく言い切った

「てめえ・・・それが殉職した同士に言う台詞かぁ！」

バズの言葉で周りのファインダー達が悔しそうな顔をする

「俺達ファインダーは、お前達エクソシストの下で命がけでサポートしてやってるのに・・・！！」

バズがまだ何かを言おうとした時、荒々しく食堂のドアが開けられた
バズ達に向けられていた視線は、一気にドアに集中する

そこに立っていたのは・・・

「ふむ。もう少し静かにできんのかお主ら。廊下まで響いておったぞ」

凄く日本の口調をした、神田に顔の似た女だった

髪型や髪瞳の色、切れ目の目など見事に一緒なのだ

ただ少し、この人の方が目が柔らかい

「なんだ？先程までは五月蠅く喚いておっただろっに。」

その人は不思議そうに首を傾げると、神田の方を向く。

「・・・・・・・・」

無言で神田の方へ歩いていくと・・・

ぎゅっ

後ろから神田を抱きしめた。なんて勇気のある・・・

「久しいのおユウ。又大きくなりおって」

「大きくって、てめえ俺の妹だろうが！」

以外にも神田は嫌がることなく、その人の台詞にツツコミを入れた

「そんなに怒るでない。それにしても・・・ユウはかわええの」

嬉しそうにその人は笑うと神田の頭を撫でる

「ばっ！！そういう事は人前でいうなユナ！！／＼／」

神田は顔を少し赤くしながらユナと呼ばれた少女に言った

ユナ・・・この人が神田の双子に妹らしい

・・・何故か浴衣を着ているのは・・・触れないでおこう

バズは驚いて少し黙るが、ユナの事は無視して神田に又怒鳴り始める

「・・・それを・・・それを・・・飯がまずくなるだあ!？」

神田に殴りかかると、動いたのはユナだった

短刀を逆手に持ち、バズの首筋に当てる

「お主、私のユウに殴りかかるとは・・・いい度胸をしておるのお

大丈夫じゃ。それ以上ユウに危害を加えないのなら、命まではと
るまい」

口調はのんびりとしているが、ユナの瞳は明らかに・・・怖い

「おまえには、関係ないだろ!？」

「関係ないじゃと？私のユウに危害を加えといてか？

発言がなっておらぬ。本当にお主は死にたいのだな」

ユナが殺意たつぷりの眼光で睨むとバズは冷や汗を垂らす

「もういいぜユナ。これは俺に向けられた事だ、ユナは見てるだけでいい」

神田はユナの頭の手をのせ、撫でる。先程とは逆だ

「そうか・・・ユウが言うならしかたない。我は引こつ」

ユナが短刀をしまい、神田の横に立つ

すると神田はバズの首を右手でつかんだ

「サポートしてやってるだ？ちげえだろ、サポートしか出来ねえんだろ？」

それにてめえ、もしあの時ユナに当たってたらぶっ殺してるぞ

サポートしか出来ねえ・・・はずれものだ。ファインダーならいくらでもいる」

神田の発言に周りのファインダーが殴りかかろうとした・・・時

「ストップ！」「」

アレンは神田の腕を、ラルトはファインダーに切りかかろうとしていたユナの腕を掴んだ

「「関係ないところ悪いんですけど、そういう言い方はないと思いますよ」「」

ラルトはユナに笑いかける

「おお・・・ラルトか。久しいのぉお主も可愛くなってる」

ユナはラルトに笑い返すと、刀を鞘にしまう

「離せよもやし」

「もやし？アレンです」

「一ヶ月くたばらなきゃ覚えてやるよ。ここじゃたばた死んでいくやつが多いからな」

こいつらみたいに」

神田の言葉でアレンの腕にも力が入る。それでやっと、バズの首から神田の腕が離れた

「そういう言い方はないでしょう。」

「呪われているやつが、俺に触るな」

・・神田、禁句を言ってしまいました

「呪われている？ふざけないくださいよ・・ぱつつん」

ラルトの声音が変わり、神田の首を絞め始める

「最初の頃にも言いませんでしたっけ？呪われているなんて言うなって・・」

それとも、学習能力がなってないんですか？なんならこのまま殺してさしあげてもいいですよ」

にこりと黒い笑みを浮かべながら首を絞めていく

「ちよいと待てラルト。ユウが死ぬ」

「ふえ？うあわわわ！！すみませんユウ！本当にごめんなさい！」

ユナの言葉でやっと我に返ったラルトはすぐさま腕を離し、謝る

「けほっけほ・・・」

「・・・相当強く締められたようじゃのお」

咳き込む神田の元にユナが寄り、抱きしめる

「しかし、ユウも悪い。もう少し、人の事を考えてやれ」

「・・・分かった・・・」

ユナの言葉には素直に従う神田。ユナは最強かもしれない・・・

「早死にするぞ・・・お前」

ふいに神田がアレンに声をかけた

「嫌いなタイプだ」

「そりゃどうも・・・」

二人の間に火花が走る

「・・・見えた気がした

周りのファインダーはその気迫に負け、四人から離れていく

そして、火花が炎と化したした時

「あ、あそこよリーバー班長。」

リナリーが書類を抱えて食堂の前に立っていた

「おお。神田ーアレンーラルトーユナー」

リーバーは四人を呼んだ

つと、二人はにらみ合った瞳のままリーバーの方を向いた
隣でラルトとユナが不思議そうに振り返る

リナリーは神田とアレンに苦笑いしながら立っていた

「司令室に来てくれ、任務だ」

「室長・・・室長・・・起きてください」

司令室では、コムイで書類の上につつ伏せて眠りこんでいた

リーバーが何回いっても起きない為、最後の手段にでる

リーバーはコムイの耳元に口を近づけると・・・

「リナリーちゃんが、結婚するってさ」

そう言った瞬間に

「リナリー!!!」

コムイが物凄いスピードで立ち上がった。顔は青ざめている

その後顔を赤くしているリナリーに泣きながら抱きつく

「お兄ちゃんに黙って結婚なんて許さないからね！許さないからね！」

後ろではぼかんと口を開けて固まっているアレンと神田

そして、微笑んでいるラルトとユナがいた

「悪いな。このネタでしか起きないんだお、この人」

日常的とでもいうように、リーバーは言った

たんこぶを1つ作ったコムイは、そのたんこぶを隠すように帽子を被りなおした

「任務の話の前に、神田くんとアレンくんちょっといいかな」

コムイが言うと、ラルトとユナは空気を察したようにその場から離れた

「なんだよ」「なんですか」

二人が問うと、コムイは深刻そうな顔をする

「ラルトちゃんとユナちゃんの部屋の事なんだけどね・・・」

新しい部屋にすると、周りは他のエクソシストばかりだから・・・

あの二人の事だから普通に招き入れん・・・」

「「同室にして下さい／しろ」」

コムイが最後まで言い切る前に、二人は即答した

「僕の場合、最初から決まっていたし違う部屋なんて考えられま

せん」

「ユナなら普通に招き入れそうだからな。危ねえだろ」

それぞれに理由を述べると、ラルトとユナを呼ぶ

「終わったみたいですね」

「そうじゃのお」

二人は内容を気にするでもなく、アレンと神田に近寄った

「早かったですね」

「はい」

ラルトはぎゅっとアレンに抱きつくと、嬉しそうに微笑んだ

「話し合いは終わりか」

「ああ」

ユナは神田の頭を撫でた後、後ろから抱きしめる

神田の背は高いはずなのだが、ユナは少ししか変わらない

それにしても・・・ラルト、十五歳にしては綺麗過ぎる

そして、十八歳であるユナも異常に綺麗だ

いや、ラルトの場合幼く見えるが・・・言わないことにしておこう

「さて、時間がないのでコース上聞いたら4人にはすぐに出発してもらおう」

ラルトとユナはさておきとして、アレンと神田が叫んだ

「「4人!!?」」

何故だろう、心なしかエコーがかかったように聞こえる

「俺がこんな呪われたヤツと!?!」

「なっ・・・」

あっ、またやったね神田

「・・・・・・ぱっつん」

ラルトは見えない程の速さで、瞬く間に神田の首を掴んだ

全てを包み込めない手だからこそ威力は大きく、壮大な痛みが襲う

「そんなに・・・死・に・た・い・ん・で・す・か・?」

ラルトの顔にはだんだんと黒い笑みが広がり、楽しそうに目を細めた

「くっ・・・ラルト・・・」

神田が苦しそうに声を出すと、ラルトは少しだけ顔を顰める。そして

「・・・あれっ？って、うわわわわ！！ごめんなさいユウ！また私・・・」

正気に戻った

驚きからか、自分のした事への罪悪感からか分からないが、泣いている事だけは分かる

「すみません・・・」

深く深くお辞儀をすると、泣いている顔を隠すかのようにアレンの胸に顔を埋める

「・・・けほっ、いや、俺も悪かった。すまんラルト」

「ころっ」

アレンに対してではなく、ラルトに対して謝った神田の頭をユナが叩いた

「ちゃんと謝らんか。礼儀がなっておらぬぞユウ」

「・・・」

どうしてもアレンに謝りたくないらしい神田は、黙ってユナの瞳を見つめる・・・っと

ユナは行動にでた。

神田に目の前に立ち、顔を近づけたのだ

鼻がくつついている状況は、遠めに見れば恋人同士にでも見える

「あとで我から謝っておく。その代わり、ユウは我に謝れ。その心を伝えてやる」

「っ!?!?・・・すまん。」

一瞬驚いた表情をした神田だが、すぐにいつもの表情に戻る

ユナに謝ると、有難うとでもいうかのようにユナの頭を撫でた

「つと、さっきの話しに戻るよ?。」

コムイの声で、アレンと神田は自分達は何に対して叫んでいたかを思い出す

「コムイさん、本当・・・ですか?。」

アレンが聞くと、コムイは楽しそうな口調で

「っっそ4人コンビでね」

二人に向かって言い放った

ソファに座っているアレン達は、真ん中にラルトとユナ

その左側にアレン、右側に神田と、兄妹どうし隣に座っていた

アレンと神田は遠いたため、顔を見合すこともあまりないのだが、それでも顔をお互いに反らす

二人共不機嫌そうな顔をして、任務の資料を握り締める

「えっなにーに？もう仲悪くなっちゃたの？君ら」

”そうですよ”とでもいう様に、困った顔のラルトと、苦笑しているユナは頷いた

・

「出会ったときがアレだったから」

やたらと『あれ』を強調させて、少し怒り交じりにリナリーが言った

きつと、先程の事で怒っているのだろう

「ぎくうっ！」

何故か擬音を口にすると、あからさまに反応した

コムイは一度咳払いをしてから、地図の描かれたスクリーンを手で下げた

「我儘は聞かないよ。南イタリアでイノセンスが発見された。

だが、AKUMAも気づいて狙っているらしい、早急に現地に向かい

相手を破壊しイノセンスを保護すること。詳しい内容は、途中で資料を読むように

以上だ」

静かで薄暗い空間

その中には水脈があり、船が見える

「これ、着なきやいけないんですか？」

アレンがコムイに聞くと、コムイはゆっくりと頷いた

「エクソシストの証みたいなものだね。戦闘用に作ってあるから、かなり丈夫だよ」

アレンの着ている団服は、

黒と白の二色しかなく、コートのように、真ん中でボタンでとめている

後ろにはフード、左胸には、エクソシストの証である複雑な太陽の飾りがついていた

ラルトの団服は、

これまたモノクロで、作りはアレンと一緒になのだが、

下がスカートで、端に白い字で何か得体の知れない文字が書かれていた

「ああ、それと、ラルトちゃんの団服は皆のと少し違うからね」

「何処がですか？」

質問したのはラルトではなくアレンだった

ラルトはというと・・・アレンに抱きついて小さく震えていた

前の文で分かっている人もいるかもしれないが、ラルトは暗い処が

ダメなのである

「うん。見た目的には変わらないんだけどねえ、皆のよりも軽く作られてるんだよ

あつても丈夫なのは変わらないよ」

へーと感心すると、ラルトを見やる

「・・・・・・・・ア・レン・・・・・・・・」

そんなに怖いのか？と聞きたくなるが、彼女にとって暗闇は何よりも怖いのだ

しかたがない

つと、アレンの袖口からティムが出てくる

「ティムキャンピー！お前何処行つてたんだ？」

答えるはずのないティムに聞いた後、安心したように少し微笑んだ

つと、ティムは迷う事なく、ラルトの頭に着地すると、スペードのような形をした尾を

自分の脇において、落ち着いた

そのこともあつてか、ラルトの表情が少しだけ和らぐ

「あ・・・・の・・・・」

「ん？なんだい？」

ラルトがふいにコムイに声を掛けた

その表情は、今だに暗闇に恐怖感を抱いたままだが、穏やかだった

「えと・・・書類・・・頑張つて、くだ・・・さい」

「っ！」

にこつと笑ったラルトを見たコムイは、不適に笑いながら眼鏡の淵を上げた

「フフフフっラルトちゃんに言われちゃったらもう僕頑張っちゃう」

ハイテンションにニヤニヤしているコムイを、リーバーが呆れながら見た

「はぁ・・・まあ、ラルト。ありがとよ」

「・・・はい」

弱弱しく笑うラルトに、リーバーは頬を赤らめた

そして、顔を見せないようにプイと顔を逸らす

その行動に首を傾げるも、気にしなかった

「ラルト、乗りますよ?」

「あ・・・はい」

アレンにひょいと抱きかかえられ、船に乗り込む二人

その姿にユナが笑いを漏らした

「本当に二人は、仲良しじゃのお」

「異常だろ」

神田がつつこんだが、ユナはさらっと受け流した

「ユナの考えてる事が、イマイチ分かんねえ・・・」

「そうかのお?」

微笑みながら訊くユナに、神田がため息を吐いた

「まあ、こういうことじゃ」

「なっ!!?」

素早くユナは移動し、神田の唇に、軽くキスをした

顔を真っ赤にしている神田に、ユナはまた笑いを漏らした

「ユウはかわええのお」

くしゃりと頭を撫でると、神田の膝の上に座る

神田がユナを抱きしめていたのは、ユナ以外知らない・・・かもね

ラルトもアレンの膝の上にいたが、アレンの胸に顔を埋めるように座っていた

とにかく・・・怖い

大丈夫なのか、と苦笑いを浮かべるアレン

ファインダーが棒を使い、船を川へと出す

ゆっくりと船が進み、コムイ達のいるところから少し離れたときだった

「君達の過去を見せてもらったよ」

いつの間にか普通の表情に戻っているコムイ

「えっ・・・」

不思議そうな顔をしたアレンと、顔を少しあげたラルトがコムイの方を向いた

「タイムキャンピーには、映像記録機能がついてるんだよ」

今だに不思議そうな顔をしているアレンと、理解できていないラルトに

「いつてらっしやい」

コムイが笑顔で手を振った

一瞬驚いた様な顔をした二人だが、コムイの笑顔を見て微笑んだ

「「いつてきまーす！」」

ラルトは少し手をふってから――

「にゃふっ！？」

「ラッラルトオ！？」

先ほどもよりも暗い、灯り1つない空洞に入った為

アレンの首に手を回し、そのまま気を失った

カーン・・・カーン・・・

汽車のベルが鳴り響く闇の色の街

その家々の屋根の上を、ファインダーを含めた5人が進んでいた

「ちょっと待ってくださいよ!!」

アレンが叫ぶ・・・が

「そんな時間はない」

「ラルトを落としたら、唯ではないぞ」

「もちろんですよ」

神田の言葉に少しムツとしたアレンだが、ユナの言葉には即答した

——ラルトは一生離しません

心の中でそう呟くと、彼女を抱いている腕に力が入った

「汽車が来ます」

ファインダーが言った直後、今、下を通っている汽車に橋からダイブした

「ちょおおおお！これに乗るんですかああああ！？」

ドガンッ

顔を真っ青にし、冷や汗を流しながら汽車の屋根に乗ったアレン

よくやった！！

初めてだったため、跡をつけてしまったが・・・このさいいだろう

今だにスヤスヤと眠る・・・ように気絶しているラルトの顔を見ながら

ふうと、ため息を吐いた

「とっ飛び乗り乗車・・・」

「いつもの事です」

ファインダーがあまりにも冷静に答えた為、日常茶飯事だと認めざるを得なかったが

「・・・ん？」

ラルトが目を覚ました時、ファインダーの前で礼をしている乗務員の姿が目に入った

——ここは何処だろう

ぐると首を回し、辺りを見回す

唯の汽車の中だ

暗い処はもうなく、安心したように息を吐いた

「予約・・・ですか。」

「？」

上からアレンの、そのような声がして。ラルトは首を傾げた

「「うわー……」」

案内された部屋は、小奇麗で、無駄に広い部屋だった

ソファのようにふかふかな、長椅子は二つしか置かれていなかったが

「すごい個室……」

「ですね」

まあ、その通りであろう

だって、4人のいる部屋の扉には

《First Class》

の文字が書かれてあるのだから

「そういえば、何処に行くんですか？」

口を開くと、神田の驚いた様な顔を飛び込む

首を傾げれば、頭の上に柔らかい感触

・・・アレンの手

「神田は、ラルトが気がついたこと、知りませんでしたから」

「そう・・・でしたか。何か、すみません」

「はっ？」

「ラルト、気にせんで良い。ユウは、謝られた意味がわかっておらぬ」

ユナの言葉も理解できなかったのか、神田が瞳を2、3回パチパチさせた

その後、ユナがくすくすと笑ったのを見て、頬を少し赤らめ資料に目を戻した

「そういえば、何処にいくか・・・でしたね」

アレンは懷から資料を出し、読み始める

「目的地南イタリア、古代都市マテール・・・」

あれ？と、疑問の声を漏らすラルト

「それって確か、随分前に滅びた都市・・・ですよネ？」

「はい」

「そうじゃのお」

「確かな」

それぞれに返答する

「ターゲット、マテールの亡霊。・・・亡霊？」

「亡・・・霊・・・です・・・か？」

体が芯からさめていくのが分かった

血管の一本一本が縮小し、血がどこからか抜けていく感じ

無意識の内に体が震え始めていた

――亡霊なんて、いるわけありません

自分自身にそう、何度も言いかけるが……

「……………」

無駄のようだ

背中を冷たい空気が撫でた

ような感じがした

先ほどから小刻みに震えだすラルトを不思議に思ったのか

神田が口を開いた

「おい……大丈夫か、ラルト」

「にやふあっ!?!」

「ラルラルトオオオ!?!?」

本日二回目の気絶

「……今のは、俺が悪いのか?」

「我に聞かれてもな・・・」

微妙な罪悪感に狩られる神田の問いに、ユナは苦笑いを浮かべていた

「まっまあ・・・ラルトは大丈夫なんで、話しの続きなんですけど・・・」

自分の膝にラルトの頭を乗せ、撫でながら言った

そして、二人に問う為顔を上げる

「なんで亡霊が、イノセンスと関係あるんですか？」

・・・その問いかけから数秒

なんとも言えぬ沈黙の中、ユナは固まっていた・・・が

「ふっ・・・」

「くすっ・・・」

鼻で笑った

ユナに至っては、声を上げて笑うのを必死にこらえているようであった

「ああっ！！今、バカにしたでしょっ？」

「してねえ」

「絶対しましたあ！」

「まあ、ちと落ち着けアレン。そうムキになるでない」

「つて、ユナだってバカにしてたでしょ？」

「ああ。笑いを抑えるのは、困難なことじゃ」

「それはそれで素直すぎですっ！！」

激しい・・・が、低レベルな言い合い

いや、この際低レベルなのは、アレンだけか

「イノセンスのあるところには、奇怪な現象が起こるのじゃ」

今だにまだ、くすくすと笑っているユナだが、説明しようとしてくれているらしい

「奇怪？」

アレンは顎に手をあて、考える素振りをみせた

ユナは一度目を閉じてから、話し始める

その表情は、先ほどまでとは打って変わって真剣そのもの

編み足を組み、アレンの瞳を見据えた

「イノセンスは、大洪水の時代から現代までの間

様々な姿形に変化しておる事が、多いのじゃ」

髪をかきあげ、ピアスを1つ、右耳から取った

「その結晶の不思議な力が導くのか、人間に発見された時

色んな姿、形に変化しておることが、多いのじゃ。分かるか？」

こくんと頷くアレン

「そして、理由は分かっておらんが、必ず奇怪現象を起こすのじゃ

・・・私のイノセンスの1つはこれじゃ」

先ほど取ったピアスを、アレンに見せ

「説明は後ほどにとっておくぞ」

早々とピアスを元に戻した

「ってことは・・・この亡霊の事件もイノセンスが起こした奇怪現象かも・・・ってこと」

「そうなるの。」

「「奇怪ある場所に、イノセンスあり」」

ユナに続くように廊下から聞こえる声

ファインダーの声だ

「だから黒の教団は、そういう所にファインダーを派遣して
風潰しに、調べるのです」

アレンがユナと廊下、二つを交互に見たため

「そのとおりじゃな」と、答えた

アレンはラルトを見やると、横抱きにした

「ちょっと、挨拶に行ってきます」

「おう」

ひらひらと手を振って、ユナが見送った

なるべく音をたてないように扉を開くと、すぐそばにいたファイン
ダーに向いた

「マテールの・・・亡霊も？」

「はい」

アレンの問いに頷きながら、ファインダーは立ち上がった

「アレン・ウォーカーです」

「今回の付き添い役、ファインダーのトマです。

・・・そちらのお嬢さんは？」

事前に資料は渡してあったのだが、ラルトの事は書かれていなかったらしい

・・・コムイの策略だ

「あぁっすみません・・・。ラルト、起きてください・・・」

優しく頬を撫でると、ラルトが薄らと瞼を上げた

「ん・・・」

頭を上げると、トマの顔を数秒間凝視した

その後、静かににこりと笑みを浮かべた

「ラルト・ウォーカーです。よろしくお願いいたします」

「はっはい。ファインダーのトマです」

今の数秒間で、場の空気を察したラルト

少しトマは驚いたが、すぐに挨拶をする

それぞれに握手をすると、トマが少し困ったような顔をした

「どううしたんですか？」っと、二人で問うと

「ウォーカー殿は、ウォーカー殿なんですけど、ラルトさんは・・・」

「じゃあ、ラルト殿！」

「「は？」」

即答したラルトに、アレンとトマは間の抜けた声を出した

「あの・・・何ていうか、殿って・・・格好良いじゃないです・・・か？」

控え気味に言った彼女に、トマは優しく微笑んだ

「分かりました。よろしく願いします、ラルト殿」

「はい！」

ニコニコと笑っているラルト

今回は、奇跡的に仲良くなれたが、教団ではそうもいかないのだ

ラルトは、極度の人見知り

友達など、今だに出来ていないのだ

アレンは、ラルトに仲良くできる人が出来たのが嬉しくて

ラルトの頭をくしゃりと撫でた

ふと、二人の視線が、今々やっていたと思われるトランプに止まった

「ずっとやってるんですね」

「習慣です」

声が重なった事については、トマはすぐに双子だと悟り何も言わなかった

「好きなんですか？」

ふいに目に留まったカードを手にとった

――見事に同じ、ジョーカーのカードを

廊下に座り込み、カードを眺める

アレンの足の間にラルトが座っていて、ジョーカーとにらめっこをしていた

そんな姿を、嬉しそうに見ているアレンに

「ウォーカー殿。マテールの亡霊のお話は知っていますか？」

トマが話しかけた

その瞬間にラルトの動きが止まる

その後、がばつとアレンに抱きついた

恐怖の亡霊話タイム、当来！！

「あっはは・・・いえ、知りません。」

「大丈夫ですか・・・？」

「大丈夫なので、きっと」

アレンにしがみついて、小さく震えているラルトの背中を擦りながら、苦笑を浮かべた

「そう・・・ですか。こうです」

大昔に滅んだマテールの街に亡霊が住んでいる

亡霊は、かつてのマテールの住人

孤独を癒す為に、街に近づいた人々を引きずりこむと・・・」

ついにしゃくりあげているラルトを、強く抱き寄せながらアレンが嘆息した

「何処にでもあるような話ですね」

床に落ちているジョーカーのカードを手に取りながら呟いた

「私達ファインダーは、そんな噂が1つでもあれば其処に行くのです

そして、噂真理。イノセンスの有無がはっきりするまで

其処で何ヶ月も調査するのが、仕事なのです」

少し息を吐き、又、話し始める

「殆どは、唯の噂か作り話です。

たまに本当の事があっても、イノセンスが関係しているとは限りません

でも、そのわずかな可能性の何処かでイノセンスが見つかったら

」

「その時は、俺達の出番ってことだ」

急に話しだした神田に、アレンが驚いて顔を上げる

神田兄妹は、「又ラルトは・・・」と、ため息を吐いていたが

「「そろそろ目的地だノじゃ」「」

長いポニーテールを揺らし、呟いた

静かになったその場には、アレンが叩きつけるように床に置いたトランプの音だけが

響いていた

—0—

刃のような風が吹き付ける荒野

そこを、5人が走っていた

・・・いや、今更だが5人とも足が速い

女であるラルトやユナも、簡単そうに走っている

ラルトは体重が軽いから、あるのだろうか・・・

トマが走りながら、背負っている通信機に耳を当てている

先に、マテールに行っているファインダーに連絡を取ろうとしているのだ

「トマ、どうだ」

神田が横目で見やりながら、訊いた

トマは神妙な顔つきで神田に向く

「通じません」

「急ぐぞ」

この事に、何かあると思ったのだろう

神田の声で、5人はスピードを上げる

———
その時

「「・・・？」」

「「っ！？」」

前者が、神田兄妹

後者がウォーカー兄妹

何かに、気がついたらしい

アレンとラルト、それぞれの瞳に赤く複雑な模様が浮かび上がった

「「この、冷たい空気・・・」」

同時に顔を上げ、マテールの街を見た

その真ん中辺りに、浮かんでいる三つの光り

二人は集中し、その光りを見る

そこには、AKUMAと思われる丸い物体と、その上に光る誰かの魂だった

（AKUMA・・・ですか）

ラルトが歯をぎしつと噛み締めた

「AKUMAが・・・見えるのですか！？」

いつの間にか後ろにいたトマが、驚きの声を挙げた

「ん？・・・」

振り向き、又、前を向いた

「僕の左目はAKUMAを見分けられるんです。

正確にはAKUMAに内臓された、魂だけど・・・」

「私は、その対の右目です」

そう答えると、ラルトはにこりと微笑んだ

—— 少し、寂しそうに

「呪われた瞳・・・か」

「・・・ユウ」

ユナが呆れたようにため息を吐くが、ラルトは何もしなかった

「今のは、私だけへの物と考えておきます

これ以上、ユウに殺しかかるのはアレだと思うので・・・」

へらっと笑うラルトを見て、ユナが苦しそうに顔を顰めた

「私には、はつきり言ってもらえていいですよ？」

はつきりと、化け物だって」

「ラルト・・・」

横でアレンが泣きそうな顔をするが

「大丈夫ですから」

そう言い、笑うラルトに気を遣わせないため、少し笑った

ユナが神田の耳元に近づくと

「ラルトは、稗知れない苦痛をしっておる」

そう囁いた

神田が、本日何回目かのため息を吐くと

「悪かった」

静かに、闇に消え入る様な声で呟いた

その後、ラルトとユナをトマに近づかせ

走りながらも、神田とアレンが話せるように指示した

「おい、戦う前に言っておく。よく聞いとけもやし」

少しムっとするが、何も抵抗しない

素直に聞くようだ

「俺はお前みたいな甘っちょろい考えは持っていない

もし、お前が殺されそうになっても

任務遂行の邪魔だと判断すれば、見殺しにする

変な仲間意識を持つな。へたに感情で動いたりするんじゃない

だが・・・」

「大切な人は守りますよ。もちろん」

神田を睨みながら、アレンが言い放った

「ふんつ。せいぜい守れ。俺はユナしか守らねえ」

「分かってますよ。それにしても・・・」

そこで、離れていた3人が2人に近づく

もうすぐで、マテールに着くからだ

「やな言い方」

「ふえ？」

「？」

ラルトとユナが、ハテナを浮かべたが

「行くぞ」

神田の声で、真っ直ぐと前を見据えた

マテール前をおおっていた崖を飛び降りてから数分

トマは何度も、ファインダーに連絡を取ろうとしているのだが・

「まだ、通じないのか？」

最初のように、神田が訊く

「はい、全く通じません」

鼻から下が、布のような物でおおってあるトマの口は見えないが

きつと、齒をしかめているだろう

「変だな・・・ファインダー部隊は結界発生装置を持っているはずだ

生き残るくらいなら可能だろ」

最後の『ろ』の音と共に、マテールの中に飛び入った

「装置は・・・あそこです！」

何かの屋根の上に立っている5人

トマが指さしたところがよく見える

そこにあっただのは、虹色に光っている正方形のキューブだった

中に入っていると思われる影は、小さいものが二つ

お互いに抱き合っているようだ

「マテールの亡霊か・・・」

ユナと神田が、落ち着いたように言った

「えっ・・・でもそれじゃあ」

「ファインダーの皆さんは・・・」

ラルトとアレク。二人の脳裏に浮かぶ、嫌な直感

「結界発生装置をマテリアルの亡霊に当てて、守っている

貴方達、エクソシストが来るまで守る為に」

トマが言った直後

ズドドドドドド

上から、紫の弾が結界に向かって降り注いだ

—— AKUMAの砲弾だ

「そんな・・・」

「最善の策だ。」

「ええ」

三人がそう呟く

ラルトとユナは、黙ったまま結界を見つめていた

ドガアアアンッ

ものすごい爆音

ガラスが割れる音もする

その方向を見れば、マテルの亡霊からはかなり離れた場所で・・・

「っ！まだ生きてるっ」

アレンとラルト。二人はそう叫ぶと、飛び上がった

「！？ウォーカー殿！ラルト殿！」

「放っておけ」

驚いたトマに、そう神田が制止をかけた

（ラルトはもやしが、命をかけてでも守るだろうからな）

心の中でそう呟き、嘆息してからユナを見やる

「・・・」

静かに、遠くを見つめるユナ

数秒すれば、こちらの視線に気づいて振り返る

そして、何か悟ったのか神田の方に近づいた

「急がねば結界が持たない・・・そう言いたいのであるっ?」

「正解だ」

屋根を飛び渡っていく二人

その視線の先で、またも炎が上がった

二人で飛び上がると、今やっと逃げてきたファインダーの姿が見えた

「・・・っ！殺られる」

ラルトがそう叫び、ファインダーの元に一瞬で移動した

アレンが目丸くし、驚いている

・・・が、そんな事関係ない

ファインダーを守るように抱きしめた

「エクソ・・・シスト・・・」

「そうです・・・貴方は私が命をもつて守ります」

相手を心配させないようににつこりと微笑んだ

その後ろで

「にーっ」

不適に笑い、そのままラルト達に

ズガガガガガガ

撃ちはなった

その時だった

「死ぬのは・・・死にかけの僕でいい!!」

くるっと立場が逆転し、ファインダーがラルトを庇った

「えっ!?!ちよっ・・・!!!!」

弾は2、3発ほどファインダーのあたりその後、ラルトの体を貫いた腹部に吸い込まれていった銃弾だ、面白いように穴を開けた

「じめん・・・なさい・・・」

頬を涙が伝い、ラルトは天を仰いだ

幸いな事に、ラルトに当たったのは一発のみ

ほかの弾は、ラルトの周りのコンクリートを抉った

（大丈夫、これくらいじゃ死なない・・・死なない・・・）

そう言い聞かせ、遠のいてくれない意識をそのままに

何も見えない煙の中で、空を見上げた

「へへっ・・・アレンに怒られちゃう・・・」

・・・なんであの時、死んだのが私じゃなかったんだろう・・・」

その言葉を最後に、何も発しなかった

唯、心の中で呼ぶ

——アレン、早く来て・・・——

上空では、ファインダーがラルトを庇ったのがもろに見えた

そして、二人が銃弾の嵐に吸い込まれたのも

ラルトはあれくらいじゃ死なない

でも、ファインダーは助けられなかった

それは誰のせい？

・・・僕だ

自虐的になっていく中で、ラルトの笑顔がすー・・・と消えた

まさか・・・ラルトは・・・！

そんな訳ない。ラルトは・・・僕が守るんだ！！

そう思った時、煙が、この強い風のおかげで直ぐに晴れた

そこに横たわっていたのは、腹部に穴のあいた自分の妹

——ラル・・・ルト？

血がふつつと熱くなっていくのが分かった

「アレン！AKUMAを・・・倒して！！」

下から聞こえてきたラルトの叫び

しかし、アレンには聞こえていなかった

——ラルトの腹部に大きな穴

――苦しそうな笑顔

――全部僕のせいだけど・・

――お願いひと時でいいから思わせて・・・

ラルトに傷を負わせたAKUMAを、殺す！

「うわあああああ！！」

絶叫したアレンの目には、怒りしかなかった

左腕に埋め込まれたイノセンスが、エメラルドに光った

そして、発動する

自分に向かって撃ってくるAKUMAなど、眼中になかった

今だに、ラルトを殺そうとしているAKUMAを殺しにきたのだ

アレンは瞳を閉じ、少し落ち着く

今は、何もかも忘れて

怒りに身を任せる

そして、再び瞳を開いた時

左目には、また、あの模様が浮かんでいた

そのまま体重を左腕にかけて、自分に撃ってきたAKUMAを
てっぺんから真っ二つに切り裂いた

地面に着地したのと同時に、後ろでAKUMAが爆発した

しかし

ズドドドドドドドド

もう一体の、ラルトを殺しかけていたAKUMAがアレンに砲弾の
雨を降らせる

「うつ・・・！」

左腕で防ぎながら、ラルトを抱え建物の影に身を潜めた

「っ！？」

ここで、手についた何かに気がついた

ねっとりとしていて、生暖かい

それでいて、嫌な匂い

これは・・・血

「ラルトッ!!」

突発的に叫んだ

自分の腕の中で、苦しそうに顔を歪めるラルト

腹部を見やれば、止め処なく血があふれている

ラルトは、懷から白い布を取り出した

「ごめん・・・なさい・・・これ・・・巻いて・・・ほし、い・・・の・・・」

途切れ途切れで、やっと自分の思いを伝えられた

「はいっ!!」

アレンは焦る自分を落ち着かせ、ラルトから布を受け取った

きつく縛り、血が少し止まったように・・・見えた

一瞬で真っ白な布は、赤黒く染まった

「ラルト・・・ごめんなさい・・・」

「な、んで・・・謝る・・・の・・・?」

少し血に濡れた顔で、ラルトは綺麗に微笑んだ

——— 本当に綺麗に

それが見てられなくて、僕はラルトを抱きしめた

血がつくのなんて、気にもならなかった

「本当にごめんなさい・・・大好きです」

「わ・・・たし、も・・・大、・・・好き・・・」

そう言つと、電池のなくなった人形のようにガクつと首が落ちた

本日3回目の気絶

しかし、これは笑っていられるような気絶じゃない

・・・本当にごめんなさい・・・ラルト

もう一度謝り、ラルトの唇のそつとキスを落とした

ズガアアンッ

また遠くから聞こえた爆音

「バカ・・・考えなしに突っ込みやがって」

神田が吐き捨てるように言うと、ユナが煙のあがっている方を見る

「何か・・・嫌な予感がするの・・・」

ユナの脳裏には、ラルトの笑顔が浮かんでくる

（あやつ、無理をしてなければいいのじゃが・・・）

はぁ・・・っと、ため息を吐いてから

「行くかの」

「ああ」

二人は腰を折り、そのばに屈みこんだ

そして

バツ

一緒に剣を抜き取った

神田は刀身の長い、ユナは少し中途半端な長さのものを二つ抜いた

ユナは・・・二刀流なのだ

「行くぞ・・・六幻ノ虹、抜刀」

二人が、刀身を指で撫でると、眩い光が剣を包む

「イノセンス・・・発動！」

二人の剣は、眩く光った

「っ!？」

アレンが何かを悟り、後ろを見れば

神田兄妹の姿

「災厄招来・・・」

「冷絶氷鎧・・・」

同時に、叫び始める

「界・蟲・・・」

「霊・亥・・・」

対になるように刀を振り

「幻!」

「青色!」

その叫びとともに、刀が振られた

神田の刀からは、赤い瞳に白い、手足のない蟲が

ユナの二刀からは、青色の光りが放たれた

青色の光りは、蟲を包み氷の鎧を作り上げる

AKUMAが驚いた様に口を開けた

その瞬間に・・・

ズシャアッ

まるで、布が切り裂かれるようにAKUMAを蟲が突き破った

そして、青色の光りがAKUMAに移り凍らせ・・・

ドガアンッ

爆発した

「おい」

「結界装置の、解除コードはなんじゃ？」

刀を収めながら、生きていたファインダーに声をかける

「来て・・・くれたのか・・・？エクソ・・・シスト」

ユナがこくと頷いた

それを無言で見つめた後、ファインダーに向く

「早く答える。お前達の死を、無駄にしたくないのならな」

「ハブラホープ・・・希望を持て・・・だ・・・」

答えれば、早々と結界に向かう神田の背中を見ながらユナはファインダーに向いた

「すまんの・・・助けられんで」

瞳を細めながら呟いた

「いいや・・・ありがとう・・・エクソシスト・・・」

その言葉の後に、息を引き取った

「良い死を・・・尊き聖者よ・・・」

それだけ言つと、ユナは立ち上がる

「おいユナ。早くしろ」

「おお、分かつておる」

もうすでに結界に行っている神田に向かって、ユナは走っていった

マテールの亡霊（後書き）

ラルト

身長――166cm

体重――43kg↑驚異的な軽さ

ユナ

身長――173cm

体重――52kg↑こちらも驚異的な軽さ

主人公設定

主人公1

名前 華城未来

デフォルト カジヨウ ミキ

髪 紫ベースに蒼がかった色。蒼は最高の血の繋がりが・・・？

瞳 澄んだ蒼。

年齢 新妻エイジと一緒に（16歳）

容姿 超が何個つくか分からない程の美少女。綺麗よりかは可愛い
少々ロリな顔や外見をしているが、お姉さんな雰囲気である
髪型はほとんどサイドで束ね、後ろ髪は下ろしている
少し背が小さいが（本人曰く「まだ成長期が来てないだけです！」らしい）
スタイルが良く、真っ白な肌

身長 158cm

体重 38kg

誕生日 11月3日。新妻エイジと同じ日である

血液型 O型

出身 青森県

性格 天然。騙されやすい性格だが、嫌な事ははっきり言える子
従弟である最高の事が大好きで、仕事場に遊びに来る事も
しばしば・・・

最高かエイジと一緒にいないと、少し泣き出してしまつと
いう不思議っ子

備考 真城最高の従姉。新妻エイジの幼馴染

不眠症であるため、一週間に9〜10時間程度しか眠れない
更に、エイジと一緒にの時は眠れないという体質である
エイジと共にマンガを描き始めるが、そこで天才的な力を
発揮する

ジャンプに載る作品のアンケート、支持率などはエイジと
全く一緒に
未来の漫画家名が「新妻未来」な為、読者の間では新妻夫
妻と言われるほど

（エイジ曰くあながち間違つてはいないらしい）

主人公2

名前 高木現李

デフォルト タカギ ゲンリ

髪 茶髪。少し金髪かかっている

瞳 灰色

年齢 未来と同じ（16歳）

容姿 長い髪を高い位置でポニーテールに束ねている

スツキリとした顔立ちから、所謂クールビューティーである
しかし、本人は極度の人見知りであり自ら声を掛けるなど

夢の又夢

実の弟である高木秋人のことが大好きであり、ベッタリで
ある

背は並であるが、スタイルが高校生とは思えない見事なも
のである

身長 162cm

体重 43kg

誕生日 1月29日

血液型 B型

出身 埼玉県

性格 おっとりしているが、少しきつめ&毒舌な時がある

備考 高木秋人の実の姉。未来の親友である

マンガを見る目が有り得ないほどよく、読者としてのアド
バースが的確である

勉強をすることが見かけによらず大嫌いだ、成績は常に

トップ

夢は「ミュージック・クリエイター」

1、未来×エイジ始まり&出発

ぞー――

今日は朝からの雨

「こほっ・・・けほっけほっ」

そんな土砂降りの中、一人の少女は傘もささず座っていた

少女の名前は華城未来。今彼女の瞳は光りの失っている

「こんなところにいたですか」

「ん・・・？」

そつと入れられた傘。探してきてくれた人物を見据える

「高校生にもなって、無茶しちやダメです。帰るですよ」

「・・・はい」

彼は新妻エイジ。未来の幼馴染である

誰もいない土手を、二人が歩く

1つの傘に入っているのにもかかわらず、未来が小さい為窮屈そうではない

「なんで逃げ出したですか？」

エイジが聞くと、未来が手をぎゅっと握り締めて答える

「・・・悲しかったから。皆と、別れるのが辛くて・・・」

「嘘ですね」

エイジの言葉に、未来は驚いて顔を上げる

「やっと顔見れました」

雨のせいなのか、泣いていたのか、未来の濡れている頬を優しく撫でた

「っで、本当はどうしたですか？」

もう一度聞くと、今度は少し微笑んだ

「告白されたんだ」

「・・・そうですか」

いつきに空気が重くなる

「私ね、大好きな人がいるの。だからゴメンっていったら・・・」

「言ったら・・・？」

未来は袖で口を荒々しく拭った

「キス・・・されちゃって」

「・・・・・・・・」

「それが悲しくて・・・逃げちゃった」

てへっつと笑う未来の笑顔はどこか悲しげだった

「ただいまです」

「ただいま」

帰ってきたのは新妻家。未来は家族がそれぞれ遠い国へ行っているため、家は此処なのだ

「おかえりなさい、エイジ、未来ちゃん」

リビングの奥からお母さんの声が聞こえて、未来は少し頬が緩んだ

「行きますよ」

エイジに手を引かれ、廊下を進んで二人の部屋に行く

ドアを閉めるや、エイジは未来を抱きしめた

「すっかり冷たくなってます。風邪引きますよ？」

「大丈夫・・・だって、エイジがいるもん」

先程とは変わって、楽しそうに笑った

「さっきキスされたって言ってましたよね？」

「えっ？うん」

不思議そうに首を傾げる未来に、エイジは一度苦笑する

「じゃあ、僕が上書きします」

そう言うと、未来に喋る暇を与えることなくキスをした

「上書き？」

「上書きです」

普通赤くなるところだが、未来はにこりと笑った

「もう一回したいから、今度は私からチューする」

さつきとは逆の光景だ。

・・・てちよつとまで。この二人幼馴染だよな？

「そつえば未来。気になることができました」

「ん？なあに？」

「大好きな人って誰ですか？」

エイジが険しい表情で聞くと、未来は抱きつきながら言った

「もちろんエイジ！！エイジ以外いるわけない！」

それから二人で机に向かい、マンガを描き始める

互いに笑いあいながら・・・

二人が16になる少し前

「ただいまー!!」

「ただいまです」

「おかえりなさい、二人共」

あの泣き出した日から何ヶ月もたったある日だった

「エイジ・・・」

「未来・・・」

「「やったー!!」」

二人の作品がジャックに載ったのだ

「うわわゝ夢みたいだ」

「そうですね」「新妻エイジ＆新妻未来天才高校生」ですって、すごいです」

未来がエイジの膝の上に乗ったままジャックを読み進めていくと・

「・・・ここ、なんか書いてある」

「なんですか？・・・ふむふむ、「新妻夫妻か・・・!?」面白い題ですね」

載って数日だぞ、おい

「でもすごいや、私達のマンガが載ったんだよ！」

「そうですねー。未来のおかげです」

エイジはそういうと、未来を持ち上げベツトに寝転ばせた

「ってことで、寝ましょう」

「そうだねーまだ今週一回も寝てないもん」

「・・・っは？」

「最近ずーっと書きっぱなしだったからね」

「僕は寝てましたけどね」

エイジもベツトに寝転ぶ

つと未来がぎゅーつとエイジに近寄った

「一緒に入選会行けるね！」

「そうですね。前はインフルエンザで未来、出れませんでしたからね」

嬉しそうに笑う未来の頭に、ぽんつと手をのせるエイジ

「未来に言いたい事があります」

「んーにー？」

不思議そうに顔を上げようとした未来をエイジが抱きしめた

「僕、上京します」

「ふーん」

「ですから、未来も一緒ですよ？」

「うん、初めっからそのつもりですけど？」

「ってことで同棲です」

「うん、同棲だね・・・って」

今まで淡々と返事をしてきた自分に驚いた様に、言葉が詰まった

「エイジ上京するのっ!？」

「今驚かれても、困ります」

「そつかゝでも私一緒にいいの？」

「えっ？一緒にですよ、もちろん」

何を今更・・・つとエイジが笑った

今だに状況に飲み込めていない未来は、首を傾げる

「ええーつと、エイジと私が手塚賞に入選してエイジが上京する事になって

そして私も行くと、そして同棲・・・！」

何か分かったように瞳を見開く

「エイジと一緒に上京するんだ！」

「・・・未来、それさっき言いました」

未来ちゃん天然っぷり炸裂！！

「んー私はエイジと一緒にならどこへでもいいーかなー」

「ありがとうございますです」

びしい！つと敬礼するエイジ

「かわいい・・・」

「ん？」

堪らず声に出してしまう未来なでした

「じゃあ寝るです」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

二人は静かに瞼を閉じた

固く手を握り締めあつて

窓から朝日が差し込んでくる

「ふわあ〜」

欠伸をしながら目を開けたのは未来

「・・・久しぶりだな・・・寝たの」

目を細めて優しくそうに笑う

そつえばつと何かを思い出した未来

今日は・・・

「エイジのパパさんとママさんを説得した後、私のパパとママも説得する日なのは・・・」

ふと顔を上げ、時計を見てみると

「12時か。今日パパさん休みだったな」

いちど伸びをしてから、ベットから起き上がった・・・つと

「ふえ？」

ぎゅつと手を引つ張られた

「おはようございます・・・未来」

ふいに引つ張られた為、未来の体は綺麗にエイジの目の前に来る

「おはよーエイジ」

「そういえば、今日って説得の日だったです」

「ねー私さっきまで忘れてた」

人事の様に言うと、エイジの顔を近づけた

軽いリップ音が響き、顔が少し離れる

「起きよーかーお父さんとお母さんに同棲の事いいにいかなきやだね」

「はいです」

につこりと笑いあつてから、昨日から離していない手をもう一度握り締めて起き上がった

リビングの扉を開けるエイジの後に続いて、未来が顔を出すと

お父さんの嬉しそうな声が聞こえる

「おお！未来ちゃんじゃないか。おはよう」

「おはようございまーす！お父さん」

エイジと隣の席に座り、エイジに髪をといてもらっ

「いつも思いますけど、未来の髪は痛んでませんねーさらさらです」

「ありがとーエイジが毎日といってくれるからだよ」

今日も仲のいい二人

エイジが髪をとき終わったのと同時に、ママさんが席についた

「そういえば、母さんから未来が入選なんたらって言ってたが」

「はい！私とエイジ、初の手塚賞二名優勝でした！」

「なんか、全く僕のと未来の評価が同じだったそうです」

へーすごいじゃないか！とエイジと未来の頭を撫でるパパさん

未来がすごい笑顔だ

「今日パパとママに電話するね」

「分かりました。じゃあ今日日向さんと円さんに言います」

日向ひなたとは未来の父、円まどかとは未来の母の事だ

ママさんとパパさんは、エイジが先を言うように促す

「同棲させてくださいって」

パパさんがせいだいに今飲んでいたコーヒーを噴出した

ママさんは笑いながら「あら、青春っていいわね」とタオルで拭いている

「うん、同棲するの。いいですよね？お父さんお母さん」

未来が聞くと、パパさんは焦ったように言い出す

「しかしまだお前達は未成年であって、同棲など・・・」

「でも僕達結婚の約束しましたよ」

「チューもしたしね」

「「ねー」」

楽しそうに笑う二人とは対照的に、パパさんはため息を吐いた

「まあいい、私は許そう。エイジ、未来ちゃんを守るんだよ」

「分かっております！」

またびしい！と敬礼するエイジ

「エイジ大好き」

「本当に未来は、甘えん坊ですねー」

今度は言葉でも堪えられず、抱きついた

ママさんは嬉しそうに笑っていたが、パパさんは苦笑いするしかなかった

「でも、いいのか？未来ちゃんは可愛いから、こつとピッタリな人が見つかるんじゃないか？」

「まあお父さん、いいじゃないの。未来ちゃんが本当の娘になるのよ？」

「それに、エイジ以外なんて考えらんない」

「僕も、未来が他のヤツといるなんて考えられません」

口々に思った事を言うと、パパさんの表情に華が咲いた

「そうか！未来ちゃんが本当の娘に！！エイジ、絶対に幸せに
なさい！」

「はいです！！」

本日3回目の敬礼をエイジが決めた

それにしてもパパさん・・・ノリ軽いすか？

「ってことで、電話するね」

未来は電話機に近づき、早々と番号を押した

何回目かのコール音で、通話は始まる

『はい、こちら華城円。』

「あつまママ？」

未来が声をきくと、エイジが受話器を取って未来の耳から離れた

次の瞬間・・・

『キヤーー！！未来ちゃんに？？ママにお電話？？可愛いわ～
V V』

余裕で聞こえる大声で、円の声がした

「あのね、ママ・・・」

「僕と未来、同棲します」

「うん」

直球に言ったエイジ。同意する未来

『・・・・・・は？』

「あのね、私とエイジが同棲するって言ってるの」

数秒間の沈黙のあと、円の震えた声が聞こえた

『同棲？』

「うん／＼はい」

怒ると思いきや

『キャー！！！いいわね、青春よー！！ママの昔から、エイジ君と結婚したりしたら

いいな〜っと思ってたの！！いいわよ、全然OK！エイジ君一生ヨロ！

パパにはママから言っておくわ！気兼ねなくいきなさい！』

めっちゃ賛成

「本当！？ママ大好き！」

『そう？ママは世界で一番の幸せ者だわ！』

最後まで大きな声だった円さん

「相変わらず、未来のこと大好きですね」

「そうだね、でも未来も大好き！エイジは愛してるだけだね」

「嬉しいですね」

にこーっと笑いながら微笑み合う未来とエイジを、パパさんとママさんは

優しい眼差しで見ていた

おまけ

えー今回のおまけは、お話じゃないお？

円と日向の仕事について書きますね？

円と日向はえらいビッグな仕事です

円はアメリカ大統領のSP

日向はロシア大統領のSP

・・・すごいね？

ってことで、ここまで読んでくれた心の広いだれかあ！！

ありがとうございます

ではっ！！

もう1つ(前書き)

第三話の途中からです・・・

もう1つ

キンコーンカーンコーン……

全ての授業が終わった事を教えるチャイムの音が鳴った

机に座って帰り支度をしている高木、高木秋人の所に

真城……真城最高が近寄った

「やっぱ亜豆のところに行く」

そっけない顔でそう言つと、高木は意味ありげな笑みを浮かべた

「おっやっぱ気になるのか？」

からかってでもいるのだろうか

真城もそう思つたらしく

「そうなんじゃねーよ」

踵を返してドアを出て行った

「あつちよつとまてよー」

後ろを追う様に、高木が席を立った

「それにしても、仕事場ってすげーんだなあ！」

「それっぽいセリフ、前も言ってたぞお前」

靴を履き替え、校門を出ようとした時だった

「ん？なんだありや」

「さあ」

二人の目に留まったのは、人の塊だった

全員が男子生徒

「可愛いねーちゃんが何してんの？」

「高校生でしょ？」

などと声が聞こえてくる

「あー誰か女子がからまれてるな」

「でも今高校生って聞こえたぞ」

少し気のなる高木とは違って、真城は全く興味がなかった

（ってかなんで此処に来てんだよ）

心の中でそんな事を思い、ため息を吐いた時だった

「ちょっと俺、見てくる！」

高木が走っていった

止める声を出す間もなく走っていった高木に

「はぁ・・・」

またため息を吐いた

「なーどうした？」

高木が溜まっていた男子の一人に聞くと

「ああ高木か。そこにめっちゃ可愛い高校生のお姉さんがいんだよ
！！」

つと、少々興奮気味に答えてきた

そのため、高木のテンションも上がり

「マジで！？」

つと、その高校生を見ようと背伸びをしたその時

——その顔がみえた

「・・・現李・・・」

その女の子は、自分の姉、高木現李であった

「シュージン・・・何してんだか」

本日何度目かのため息を吐き、高木を見ていると

「現李！！何してんだよ！」

つと、高木の声が聞こえた

高木はその人ごみの中心にいた女を抱くと、逃げるように真城の方に走ってきた

「ちよっサイコー！！このままだと現李は愚か、俺達まであぶねーから

亜豆の家まで逃げるぞ！！！」

「はっ！？」

いきなりの事に驚くが、走る真城

数分後・・・

「「ぜーはーぜーはー・・・」」

息は乱れ、目は死んでいる二人

高木に抱かれていた女・・・否、高木現李は、申し訳なさそうに頭を下げた

「ごめんなさい・・・」

そんな現李の行動を見て、真城が高木を怒鳴ろうとした時

「現李！お前何してんだよ？危ないだろ！？」

高木が怒鳴った

その光景に

「・・・」

ポカンと口を開けて呆ける真城

「だって・・・お兄ちゃんが、迎えに行ってやれって・・・」

「そんな事はどうでもいい！兄貴のいう事全部聞く必要ねえよ！！」

それより、現李の方が大切だろ！」

「でっでも・・・」

「でもない！そこんとこちゃんと考えろよ！ねーちゃん！！」

最後の高木の言葉に、エコーがかかった

「・・・え？ねーちゃん？」

魂の抜けたような真城に、高木は首を傾げた

「ああ、言ってなかったけ？高木現李、俺の姉貴」

「ど・・・うも・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3477p/>

混純（カオス）置き場

2011年10月7日20時01分発行